

2 外部資金による研究

[概要]

外部資金の導入による研究の活発化については、歴博が追求している課題の一つである。代表的な競争的研究資金である日本学術振興会による科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）については、2022年度の新規採択件数は9件で、継続・延長を含めた採択件数では34件、総額83,651千円であった（採択課題一覧参照）。

共同研究担当 樋浦 郷子・小瀬戸恵美・中村 耕作

[採択課題一覧]

	研究種目	代表者氏名	研究課題名
新 規	基盤研究（A） 一般	村木 二郎	中世東アジア海域の地域社会と琉球帝国—集落・信仰・技術—
	基盤研究（A） 一般	坂本 稔	高精度単年輪14C測定による弥生から古墳期の暦年較正の高解像度化
	基盤研究（B） 一般	高田 貫太	航路・寄港地から見た倭と古代朝鮮の交渉史に関する日韓共同研究
	基盤研究（C） 一般	大久保純一	江戸の都市特性から見た浮世絵風景画の形成
	基盤研究（C） 一般	亀田 堯宙	Linked Dateの可視化を中心にした資料群データの理解支援手法の構築
	若手研究	井上 正望	古代・中世移行期の「都城」からみた天皇の変質過程
	挑戦的研究（萌芽）	小倉 慈司	忘れられた東アジアの古代塗料「金漆」の復元研究
	研究活動スタート 支援	土山 祐之	環境的要因と人為的要因との双方向検討による村落景観変遷史の研究
	研究活動スタート 支援	工藤 航平	日本近世における民衆の知識形成・継承・共有の特質に関する研究
継 続	新学術領域研究 （研究領域提案型）	藤尾慎一郎	考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明
	新学術領域研究 （研究領域提案型）	松木 武彦	集団の複合化と戦争
	学術変革領域（A）	箱崎 真隆	遺跡出土木材の単年輪データに基づく暦年較正の高度化と炭素14年輪年代法の確立
	基盤研究（A） 一般	箱崎 真隆	過去3万年の極端気候・極端災害史の精密編年に向けた新しい年輪年代法の基盤研究
	基盤研究（B） 一般	川村 清志	文化の主體的継承のための民俗誌の構築—マルチメディアの活用と協働作業を通じて
	基盤研究（B） 一般	三上 喜孝	古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開
	基盤研究（B） 一般	田中 大喜	西遷・北遷東国武士の社会的権力化
	基盤研究（B） 一般	小倉 慈司	格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築
	基盤研究（B） 一般	日高 薫	幕末外交と贈答美術品—遣米・遣欧使節団の贈品を中心に
	基盤研究（B） 一般	山田 慎也	超高齢多死社会を見据えた葬墓制システムの再構築：多様な生前と死後をつなぐために
特別研究員奨励費	篠崎 鉄哉	地球化学分析が可能にする津波浸水域の高精度復元	

継 続	基盤研究 (C) 一般	仁藤 敦史	古代荘園と在地社会についての高度情報化研究
	基盤研究 (C) 一般	福岡万里子	日本開国史の再構築—「開国のかたち」をめぐる国際的相剋の解明
	基盤研究 (C) 一般	青山 宏夫	実証的地名研究と地名の歴史資料化—カリヤドとは何か—
	基盤研究 (C) 一般	島津 美子	19世紀の日本における絵具素材の移り変わり
	基盤研究 (C) 一般	石井 匠	3D計測による縄文・弥生・古墳時代の土器装飾を貫流する「文様破調」の実態解明
	基盤研究 (C) 一般	吉井 文美	日中戦争・太平洋戦争期華南における中国占領地支配の進展と国際環境の変容
	基盤研究 (C) 一般	川邊 咲子	地域民具コレクションの整理手順のモデル化と緩やかな保存についての実践的研究
	若手研究	橋本 雄太	データ駆動型歴史研究のための共用テキストレポジトリ構築
	若手研究	佐川 享平	戦後の炭鉱における労働・労働災害史に関する基礎的研究
	挑戦的研究 (萌芽)	中村 耕作	縄文土器文様を奏でる：考古学と音楽教育の協同による新感覚体験学習プログラムの創出
	挑戦的研究 (萌芽)	内田 順子	沖縄/日本/アメリカ, 女/男の分断を超えた視点の構築—作曲家・金井喜久子を中心に
延 長	基盤研究 (C) 一般	樋口 雄彦	幕府瓦解後の旗本土着をめぐる研究
	基盤研究 (C) 一般	樋浦 郷子	帝国日本における学校儀礼教育の歴史・声・音の検討を中心に
	基盤研究 (C) 一般	松尾 恒一	日本仏教と東南アジア仏教の比較研究—政治と権力の視点を中心として

【科学研究費研究（新規）】

（1）基盤研究（A）

中世東アジア海域の地域社会と琉球帝国—集落・信仰・技術—

2022～2026年度

（研究代表者 村木 二郎）

1. 目的

中世東アジア海域世界では地域社会のネットワークが発達し、早くも14世紀代から活発な交易がおこなわれていた。その中心となった琉球は、単なる受動的な中継貿易国家ではなく、みずから積極的に外交交渉をおこない交易を主導した海洋国家であった。その一方で、独自の地域社会を築いていた言語も習俗も異なる宮古・八重山や奄美に侵攻し、併呑した。その痕跡は、遺跡や遺物、伝承に残るのみである。

本研究では、これまでほとんど注目されてこなかった琉球の帝國的側面に視点を据え、様々な可能性を秘めていた中世後半の東アジア海域世界の流動的様態を捉え直す。その際、これまで独擅場であった文献史学の研究に配慮しつつも、集落構造や信仰、技術に着目して基礎的データを蓄積し、考古学、民俗学、分析化学等の様々な手法により新たな歴史像を探る。第Ⅲ期目に当たる本研究では、琉球の特徴を際立たせるために、日本列島各地の地域社会にも視野を広げ、比較資料を整えることとする。

2. 今年度の研究計画

本研究は、琉球の周辺地域から古琉球史を見つめ直すことを目的とする。これまでの当該研究は、主として文献資料をもとに描かれてきたが、既存の文献資料を素材とする限り従来の研究から脱却することは難しい。というのも、奄美・宮古・八重山を中心とした琉球周辺地域には同時代の文献資料がほとんど存在しないため、後世の首里王府による編纂物に頼るしかなく、結果として首里王府史観によって周辺地域を捉えざるを得ないためである。しかし、それらの地域には集落の遺跡があり、そこから出土した遺物がある。これらの考古資料を整理、分析するこ

とで、新たな素材を増やし、周辺地域独自の文化を明らかにする基礎作業が重要となる。

初年度である令和4年度は、喜界島、宮古島、八重山の陶磁器調査、および沖縄本島や日本各地出土の陶磁器調査を実施して、データの蓄積を図る。手法としては、特定の遺跡（遺構）出土の貿易陶磁器を、同一分類基準で全点カウントする。沖縄独自の分類基準ではなく、全国的に通用する基準を用いることで、沖縄や周辺地域以外の情報とも比較可能とする。そのためにも、日本各地の遺跡を対象とする必要がある。これとは別に、文献資料班は九州地方を主とした文献資料の原本調査を実施する。考古班の陶磁器調査と併行して実施することで、既知の文献資料からも新しい見解が生まれてくることが期待できる。細胞状集落遺跡を典型とする八重山・宮古の石囲い中世集落は、日本国内では他に類例を見ない。その淵源や分布域を探るためには、韓国や台湾の同時代遺跡を踏査する必要がある。資料調査については、考古班、文献資料班で分担しておこなうが、現地調査はできる限り全体で行動し、情報や考えを共有して進めていく。また夏には、中世学研究会と連携したシンポジウムを開催する予定である。そのほか、宮古島においてシンポジウムを開催し、研究成果を一般に公開する。

3. 今年度の研究経過及び成果

6月10日 「東亜海港都市」特展策展国際ワークショップ 国立台湾歴史博物館（オンライン）

報告：村木二郎「14～16世紀の八重山と琉球」

6月25～26日 中世学研究会第4回シンポジウム「中世・港の景観」共催 於：國學院大學常磐松ホール

9月13～15日 調査 於：広島県立歴史博物館

草戸千軒町遺跡出土陶磁器調査

10月16～17日 調査 於：沖縄県立博物館・美術館

康熙帝賜琉球国王尚貞勅諭写外筒調査・研究会

11月12日 シンポジウム「宮古島と琉球帝国」 於：JA宮古大ホール

報告：村木二郎「琉球帝国と宮古島の中世」、佐々木健策「宮古島の中世遺跡と陶磁器調査」、久貝弥嗣「宮古諸島におけるグスク時代の展開」、島津美子「金頭銀荊簪」の材質分析」、小野正敏「集落遺跡が語る八重山の歴史」

11月28～12月1日 調査 於：奄美市立奄美博物館・宇検村倉木崎遺跡等

12月9～11日 調査 於：広島県立歴史博物館

草戸千軒町遺跡出土陶磁器調査

1月10～12日 調査 於：熊本県文化財資料室

多良木町相良氏関連遺跡出土陶磁器調査

3月25～27日 調査 於：広島県立歴史博物館

草戸千軒町遺跡出土陶磁器調査

コロナ禍のため、特に離島での調査に支障があった。そこで広島県草戸千軒町遺跡出土貿易陶磁器の全点調査を実施したほか、相良氏関連遺跡など良好な比較対象資料のデータ蓄積に努めた。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

【研究分担者】

荒木 和憲 九州大学大学院人文科学研究院・准教授

池田 榮史 國學院大學研究開発推進機構・教授

黒嶋 敏 東京大学史料編纂所・准教授

鈴木 康之 県立広島大学地域創生学部・教授

関 周一 宮崎大学教育学部・教授

主税 英徳 琉球大学地域創生学部・講師

中島 圭一 慶應義塾大学文学部・教授

渡辺 美季 東京大学大学院総合文化研究科・准教授

齋藤 努 本館研究部・教授

田中 大喜 本館研究部・准教授

松田 睦彦 本館研究部・准教授

◎村木 二郎 本館研究部・准教授

【研究協力者】

池谷 初恵 伊豆の国市教育委員会・文化財調査員
 小野 正敏 本館・名誉教授
 久貝 弥嗣 宮古島市教育委員会・係長
 小出麻友美 千葉県文化振興課・技士
 佐々木健策 小田原市文化財課・係長

(2) 基盤研究 (A) 高精度単年輪¹⁴C測定による弥生から古墳期の暦年較正の高解像度化 2022～2026年度 (研究代表者 坂本 稔)

1. 目的

炭素14年代法(放射性炭素年代法、¹⁴C年代法)は、人類史・自然史資料に精密な暦年代を与える理化学的年代法として、考古学、歴史学、人類学、地球惑星科学など、様々な分野で広く利用されている。2020年に北半球標準暦年較正曲線IntCalが改訂され、国立歴史民俗博物館が測定してきた日本産樹木年輪の炭素14データが多数採用された。これにより弥生～古墳期の日本産資料の暦年較正が格段に改善した。しかしながら採用されたデータは5年輪をまとめて測定されたもので時間解像度が荒く、近年の先史考古学、人類学研究の求める精度に達しているとは言い難い。

本研究では、暦年較正の基盤データ作成で世界的に主流となった単年輪での炭素14年代測定を、九州北部で水田稲作が始められた前10世紀前後から古墳が築かれるようになる4世紀以降まで、特に「2,400年問題」に絡まる前8世紀～前5世紀に重点を置いて実施する。それにより、日本列島周辺の大気中¹⁴C濃度の挙動を精密に復元して、誤差の小さい暦年較正を実現する。

2. 今年度の研究計画

弥生から古墳にかかる樹木年輪資料を確保し、年輪計測と漂白を行なって、1年輪ずつのセルローズ試料を得る。酸素同位体比年輪年代法などで年代を確定させ、単年輪での炭素14年代測定を実施する。樹木年輪の炭素14年代に反映される当時の大気中¹⁴C濃度について、その挙動と想定される地域効果について検討を進める。必要に応じ、並行する諸研究と連動しながら、弥生・古墳期以外の樹木年輪の炭素14年代との比較を行う。

3. 今年度の研究経過及び成果

弥生開始期と推定されていた、三重県桑名市で出土したケヤキ材の単年輪炭素14年代測定を実施した。ところが、並行して実施した酸素同位体比年輪年代法により紀元前4世紀の資料であることが判明し、結果的に弥生前期末から中期初の連続データが得られた。IntCal較正曲線と比較すると、紀元前4世紀初頭はやや古く、350BCにかけて若干新しくなり、紀元前4世紀後半は古めに推移する。この時期は樹木年輪資料の入手が難しく、本資料により詳細な挙動を明らかにすることができた。

宮城県仙台市在家南遺跡で出土したケヤキ材は、これまで隔年だった測定の単年輪炭素14年代測定を実施し、紀元前40年から紀元後130年にかけての連続データが得られた。1世紀から3世紀のIntCal較正曲線は日本産樹木年輪のデータが採用され、従来から形状が変更されている。中在家南ケヤキ材も基本的には改訂されたIntCal較正曲線に沿った挙動を示しているが、2世紀前半はやや従来の形状に近づいている。一方、韓半島南部の古村里遺跡で出土した同時期のノグルミ材はむしろ従来のIntCal較正曲線に沿った挙動を示していて、東アジア地域における大気中¹⁴C濃度の複雑な地域効果を反映していると考えられる。この成果は、すでに測定済だった鹿児島県鹿屋市白水B遺跡出土センダン材(紀元前1053-921年)とともにチューリヒで開催された「第24回放射性炭素国際会議・第10回炭素14と考古学国際会議」で口頭発表し、Radiocarbon誌に投稿した。

時期・地域による大気中¹⁴C濃度のより詳細な検討を行う目的で、長野県伊那山中ヒノキ(798-1055年)と三重県専修寺ヒノキ柱(1068-1436年)の単年輪炭素14年代測定を実施した。前者は全年輪の測定が終了し、後者は隔年での測定で今後も継続を予定する。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎坂本 稔 本館研究部・教授

箱崎 真隆 本館研究部・准教授
 三宅 美沙 名古屋大学・宇宙地球環境研究所・准教授
 門叶 冬樹 山形大学・理学部・教授

(3) 基盤研究 (B) 航路・寄港地から見た倭と古代朝鮮の交渉史に関する日韓共同研究 2022～2025年度 (研究代表者 高田 貫太)

1. 目的

本研究では、古墳時代(≒朝鮮半島の三国時代)における倭と古代朝鮮の交渉史を、実際に用いられた航路や寄港地の動態に焦点を定めて、考古学的に検討することを目的とする。フィールドを3世紀後半～6世紀前半の朝鮮半島西・南海岸に定め、海を望む立地にある集落・墳墓・祭祀遺跡の分析から、詳細な航路や寄港地を推定復元する。また、寄港地とおぼしき地にのこされた考古資料の多様な系譜を明らかにし、交渉にのぞむ倭系集団や百済・加耶系の集団、寄港地を生業の場とした現地集団との多角的な交流の動態を解明する。

2. 今年度の研究計画

- ・臨海性の高い集落、墳墓の集成と分析：まず3世紀後半～6世紀前半の朝鮮半島西・南海岸域における臨海性の高い集落、墳墓、祭祀遺跡について、発掘調査報告書に基づいて網羅的に集成する。当該時期の集落の資料数は300件をこえるが、対象地域の集落研究を専門とする研究協力者の知見を活用して、海を望み航路との関連性が想定される事例を抽出していく。
- ・古地図や数値地図を用いた詳細な分布図の作成：次に集成作業と並行して、近現代の地形改変以前の地理が記録された古地図やNASAが無償で提供する数値地図(SRTM)を活用し、朝鮮半島西・南海岸地域の地形図を作成する。それに基づいて、現地踏査を行いながら、集成遺跡の詳細な分布図を作成する。
- ・集落・墳墓にみられる外来系資料の集成：資料集成に連動して、集落や墳墓にみられる外来系(倭、百済、加耶など)資料について、墳墓にみられる葦石や埴輪などの外表施設、墳墓の副葬品、集落の外来系土器や住居の平面形態という分担を設けて、それぞれ集成を進める。
- ・外来系資料の系譜と分布集中地点(推定寄港地)の抽出：集成作業とともに、その具体的な系譜を、それぞれの分担に基づいて検討する。分布図作成と連動して、外来系資料の集中地点を抽出し、様々なモノや情報が集まり、多様な人びとが往来する場と判断する。そして、周辺環境(河口、海との位置関係)を古地図や現地踏査で検討し、寄港地としての機能が想定し得る地点であれば、そこを「推定寄港地」と定める。

3. 今年度の研究経過及び成果

2022年度は、まず3世紀後半～6世紀前半の朝鮮半島西・南海岸域における臨海性の高い集落・墳墓・祭祀遺跡について、発掘調査報告書に基づいて網羅的に集成を行った。次に、集成作業と並行して、近現代の地形改変以前の地理が記録された古地図を活用し、寄港地とおぼしき遺跡の分布図を作成した。

続いて、集落・墳墓にみられる外来系(倭・百済・加耶など)資料を集成し、その具体的な系譜関係を追究するとともに、それらの分布集中地点を抽出した。分布集中地点を、様々なモノや情報が集まり、多様な人びとが往来する場、すなわち「推定寄港地」と判断することにした。

上述の作業に基づいて、朝鮮半島西・南海岸(本年度は全羅道地域)において、栄山江河口、新安地域、海南半島、高興半島、光陽地域などを「推定寄港地」と把握した。いずれの地も臨海性が高く、かつ狭小ながらも平野部が広がり、かつ河川路の関連がうかがえる地点である。そして、特に海南半島において現地踏査を行い、実際の景観や遺跡の地勢についての知見を深め、「推定寄港地」としての把握の有用性を確認した。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

稲田 宇大(金宇大) 滋賀県立大学・人間文化学部・准教授
 廣瀬 覚 奈良文化財研究所・都城発掘調査部・室長
 諫早 直人 京都府立大学・文学部・准教授
 ◎高田 貫太 当館・研究部・教授

- (4) 基盤研究 (C)
江戸の都市特性から見た浮世絵風景画の形成
2022～2024年度
(研究代表者 大久保 純一)
- (5) 基盤研究 (C)
Linked Dateの可視化を中心にした資料群データの理解支援手法の構築
2022～2024年度
(研究代表者 亀田 堯宙)
- (6) 若手研究
古代・中世移行期の「都城」からみた天皇の変質過程
2022～2024年度
(研究代表者 井上 正望)

1. 目的

9世紀から13世紀ごろ、古代・中世移行期の日本において、天皇が実際の権力を失っていきながらもなぜ形式的ながら頂点に立ち続けることができたのかという問題を、平安京の内か外かという空間的認識の変化に注目して検討する。

天皇を頂点とした律令制国家を体現する政治的都市たる都城であった平安京では、西側の右京が早くに衰退し、東側の左京が栄え、平安京外にも市街地が拡大するなど、都城としての実態を失っていったことが知られる。一方で平安京の内か外かという空間基準は中世にも生き続けた。平安京は、実態としては都城としての姿を失う一方で、観念としては都城として存続したのである。従来、天皇の変質に関する研究は、実態面の究明に集中しており、形式的な面の研究は現在も不十分である。しかし、天皇が中世以降も存続し得た背景については、「形式」がなぜ生き続けたのかという点により注目する必要がある。本研究では、変化の実態とは別に形式的に生き続ける空間基準の意義を明らかにすることで、都城の主であり律令制の頂点に立つべき天皇が如何に変質したのか、その過程の一端を解明する。

2. 今年度の研究計画

本年度は本研究の初年度であることから、平安京内外の区別を考えるうえで基本となる、当時の空間認識に関する検討を中心にして行う。特に陰陽道における境界祭祀の一つであり、天皇を平安宮内裏と平安京周辺という二重の同心円構造によって守ろうとする四角四界祭の意義に関する検討、そして、実際に平安京に住む人々が空間区別をどのように認識していたかに関する検討である。併せて、当該期の天皇の変質を象徴する事例の一つである、神器の変質についての検討も行う。

これらの検討による成果の一部を、8月の本年度宗教史懇話会サマーセミナーや、11月の史学会大会で口頭報告するとともに、活字化も行う。

3. 今年度の研究経過及び成果

古代中世移行期における都城平安京の境界認識や、陰陽道の境界祭祀四角四界祭、当該期の天皇の変質に深くかわる神器について研究を進めることができた。

下記の通り学会・研究会での口頭報告を2回行った。具体的には、2022年8月に同朋大学での2022年度日本宗教史懇話会サマーセミナーにて行った、「古代・中世移行期における神器と天皇—劍璽を中心に—」と、同年11月に東京大学での第120回史学会大会にて行った、「古代・中世移行期における平安京の「内」と「外」」である。前者では神器のうち、皇位継承時に先帝から新帝へと受け継がれる宝剣・神璽（以下、劍璽）に注目し、9～13世紀の天皇や貴族たちの劍璽観の変質過程を検討した。9世紀段階では皇位継承を補強するものでしかなかった劍璽が、12・13世紀には生身の人間としての天皇とは別に、抽象化された別格としての天皇を象徴する存在へと変化する様子を明らかにするとともに、劍璽が平安京内・外のいずれに存在するかが意味を持つようになることに注目した。後者では、11～13世紀の都城平安京の境界認識に注目し、実際に住む人々が実態として認識する境界と、律令制を体現する政治的都市たる都城平安京が持つ理念的境界の2種類の境界が同時併存していたことを指摘した。これらの口頭報告において、いずれも当該期における天皇の変質と密接にかかわる結果が得られたとともに、古代史のみ

ならず中世史の研究者からの意見も頂戴できたのは大きな成果であった。

また四角四界祭に関して、下記の通り論文を執筆・発表した。

○論文

・「古代・中世移行期の天皇と境界の祭祀—四角四界祭を題材に—」（佐々木虔一ほか編『古代の交通と神々の景観—港・坂・道—』八木書店、2023年5月）

○口頭発表

・「古代・中世移行期における神器と天皇—劍璽を中心に—」（2022年度日本宗教史懇話会サマーセミナー、2022年8月21日、同朋大学）
 ・「古代・中世移行期における平安京の「内」と「外」」（第120回史学会大会日本史古代史部会、2022年11月13日、東京大学）

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎井上正望

（7）挑戦的研究（萌芽）

忘れられた東アジアの古代塗料「金漆」の復元研究

2022～2024年度

（研究代表者 小倉 慈司）

1. 目的

本研究は、古代東アジアにおいて注目されていた樹脂塗料「金漆」の復元を試みるものである。金漆は紫外線にて硬化する塗料であり、中国の台州、朝鮮半島西南部、日本の九州地方の特産品であって、武具や神社の神宝を始めとした金属製品・木製品・革製品に塗布され、光り輝かせるほか、錆止めの効果も持っていた。しかし13世紀後半には生産されなくなり、中国・朝鮮半島でもその技術が途絶えてしまっている。

この金漆は、近年、カクレミノの樹液である可能性の高いことが明らかになった。しかしまだ数多くの謎が残されている。本研究では九州地方のカクレミノ・コシアブラ・タカノツメ群生地を調査、樹液採取して分析し、それぞれの樹脂の性質・特徴を明らかにするとともに、九州の金漆産地としての特性を解明し、かつどのようにして塗布されたのかという問題を検討する。将来的には工芸品・出土品調査への応用や、海外調査にもつなげていきたい。

2. 今年度の研究計画

本研究では、カクレミノの樹皮構造の解明、樹液採取、成分分析を第一の目標となるが、九州地方の古代金漆産地のうち、具体的にある程度、地域が判明するのは対馬島のみであり、対馬での樹皮・樹液採取を第一候補とする。ただし対馬は研究メンバーの大半が居住する首都圏から離れており、状況に応じて柔軟に樹皮・樹液採取を実施するために、対馬に在住する研究者の協力を得るようにする。金漆樹液採取は古代の諸史料によれば旧暦6月であったという。よって初年度は、まず森林管理署等、調査対象樹林所有・関係機関に樹皮・樹液採取のための許可申請をおこない、ついで研究協力者である漆工芸家を中心として、樹皮構造の解明のための予備調査、また調査のための検討会をおこなうこととする。代表者が全体の統括および日本国内の文献調査を実施し、研究分担者の稲田奈津子氏が海外史料の文献調査をおこなう。

3. 今年度の研究経過及び成果

まず対馬でのカクレミノ樹液採取について、業務委託者に7月下旬から9月上旬にかけてカクレミノ自生地の探索および試験的樹液採取を依頼した。ついでカクレミノと並んで「金漆」の候補として挙げられるコシアブラ・タカノツメについても樹液採取の可能性を探り、8月から9月上旬にかけて常陸大宮市のコシアブラ樹液採取と栃木県塩谷郡船生演習林のコシアブラ・タカノツメ樹液採取も依頼した。結果として、コシアブラ・タカノツメの樹液採取は微量にとどまった。採取できた樹液は成分分析を実施した。3月19日に研究協力者も招いて研究会を開催し、検討課題を議論して来年度の研究計画を検討した。

7月14日 研究計画打ち合わせ 於萩窪 参加者5名

3月19日 研究会 於明治大学グローバルフロント+オンライン 参加者12名

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎小倉 慈司	本館研究部・教授	統括, 文献研究 (日本)
稲田奈津子	東京大学史料編纂所・准教授	文献研究 (東アジア)
能城 修一	明治大学研究・知財戦略機構 (駿河台)・客員教授	植物学 (樹皮構造研究)
本多 貴之	明治大学理工学部・専任准教授	樹液成分分析

(8) 研究活動スタート支援 環境的要因と人為的要因との双方向検討による村落景観変遷史の研究 2022～2023年度 (研究代表者 土山 祐之)

1. 目的

本研究の目的は、中世から現代に至るまでの村落景観の変遷過程を、自然災害や気候変動などの環境的要因と、それに対応する人々や村落の動向といった人為的要因の双方向から検討し、自然災害や気候変動に応答する地域社会・村落の実態を究明することである。研究においては、中世と近代を繋ぐ近世的村落景観の復元に注力し、文献資料調査とフィールドワークに加えて近年新たに提供された古気候データを活用し、領域横断的な研究として進めていく。最終的には、GIS及び情報システムを用いて中世から現代に至るまでの景観変遷を可視化し、環境的要因と人為的要因を踏まえた新たな村落像を確立していく。

2. 今年度の研究計画

今年度はフィールドワークと文献調査とを並行して行う。

フィールドワークで実施する聞き取り調査では、環境的要因が生産活動に与える影響を中心に聞き取りを行う。同時に習俗や慣行についても幅広く聞き取りを行い、それぞれの習俗が行われる範囲（地域的広がり）を把握する。その上で、そうした地域社会の形成に環境的要因がいかなる影響を与えたのかという点についても検討を深めていく。

文献調査では、近世文献資料である『小城藩日記』から景観変遷に関する資料を抽出し、古気候データと比較していく。

3. 今年度の研究経過及び成果

本年度は主にフィールドワークと文献調査とを並行して行った。

フィールドワークでは、小城市内の6つの集落において聞き取り調査を実施した。その結果、いずれの集落においても慢性的な「水不足」が問題で、近年の導水事業によって水不足もだいぶ解消されるようになってきたが、それ以前では生産活動に多に影響を与えるほどの水不足が度々発生していたことが判明した。一方で、水不足の程度については集落によって区々であった。これは各集落の置かれている地形的環境や水利灌漑機能に影響されているものと考えられ、景観変遷の経過を考察する上で重要な情報となる。また、かつての慣行や習俗などを聞き取ることもでき、集落同士の関係性の構築に、神社の氏子圏や同一水系（同じ用水路）を使用しているか否かといったことが非常に重要であることが判明した。さらに、本年度は土地改良区でも聞き取り調査を実施し、現行用水路の状況や導水事業の影響などについて理解を深めている。

一方、文献調査では「小城藩日記」から災害や生産状況を示すデータを抜き出す作業を実施し、古気候データを用いて生産状況と自然環境（特に気候）との相互関係について検討している。小城藩ではしばしば洪水や早魃が発生しているが、それらの記事と古気候データとは相関関係にあることが確認でき、古気候データを用いて当該地域の気候状況を説明できる可能性が生じている。この点については未だ予測の範囲を出ていないので、来年度の課題として残されている。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎土山 祐之
田中 大喜 (研究協力者)
貴田 潔 (研究協力者)

(9) 研究活動スタート支援**日本近世における民衆の知識形成・継承・共有の特質に関する研究**

2022～2023年度

(研究代表者 工藤 航平)

1. 目的

江戸時代の民衆の知的力量を高く評価する近年の傾向に対し、民衆の知的力量を正しく評価するには、手習所数や識字率という数値ではなく、知識－簡易な記録行為ではなく、知的情報処理を経た成果－の形成・蓄積・継承という知識形成プロセスについて、時代状況や個々の社会的環境を踏まえた多様な具体相の解明と評価が必要である。

しかし、従来は史料の制約を理由に、一部の頂点的思想家や知識人や記録・著作を残した人物のみが研究の対象とされ、学問的・思想的な知識の解明が主とされてきた。

本研究では、①これらの史料的課題を克服するため編纂物・蔵書に注目し、これらの新たな史料的価値の創出と、②日本近世社会を特徴づける身分制的秩序と、個人を取り巻く固有の歴史的社会的規定性を踏まえた多様性、そのもとでの多様な知識のあり方、③面的把握による個別の立場性を超えて共有された規範意識や秩序の解明を試みる。そのことで、近世社会特有の知識構造を解き明かすことを目的とする。

2. 今年度の研究計画

本年度は、加賀藩十村役のうち、体系的に編纂物・蔵書を有する新田家文書（石川県立歴史博物館寄託）と岡部家文書（同県宝達志水町所蔵）の調査を実施する。編纂物のデータベースの構築、デジタル撮影で収集した史料をもとに、主要な編纂物のテキスト分析、蔵書の構造分析を行う。なお、2023年度に重点的に実施する川喜田家文書（石水博物館所蔵）の予備調査を実施し、次年度における迅速な調査が行えるよう体制を整備する。

3. 今年度の研究経過及び成果

計画していた調査の一部とともに、新たに情報を得た史料群の調査を行い、以下の点で研究を進めることができた。①加賀藩十村岡部家文書（石川県宝達志水町）の史料調査と分析、②松坂商人小津家文書（東京都中央区、三重県松阪市）の概要および文献調査、③大阪府泉大津市立図書館所蔵朴斎文庫（大阪府泉大津市）の史料整理と分析を行った。

②では、松坂の本店と江戸店で蓄積・継承された資料群の所在調査および概要調査を行い、一部史料についてはケンブリッジ大学アジア・中東学部日本学科と当館との古文書研究会（オンライン）でのテキストとして分析を行った。

③では、近代に活躍した郷土の文化人である近藤朴斎の文庫（近世の版本・写本が中心）について、泉大津市教育委員会と協力し、史料目録の整備と全体像の把握、蔵書印や書き込みをもとに旧蔵者や古書流通の調査を行い、史料所蔵機関での市民講座において調査の経過報告を行った。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎工藤 航平 本館研究部・准教授

【科学研究費研究（継続）】**(10) 新学術領域研究（研究領域提案型）****考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明**

2018～2022年度

(研究代表者 藤尾 慎一郎)

1. 目的

AMS—炭素14年代測定によって相対年代から数値年代への転換が進む高精度な較正暦年代に基づいた弥生時代研究と、DNA解析が急速に進んでいる分子人類学との異分野研究によって、数値年代にもとづくDNAのあり方が復元できる。その成果は、弥生～古墳時代の親族構造や通婚圏、人口増加率などを得るために有益な情報となる。特に九州北部に分布する弥生時代の甕棺出土人骨から採取したDNAと、同人骨の炭素14年代測定によって得られ

た死亡年代を比較して、数十年単位の高精度な時間軸に基づいたDNAを導きだし、墓に葬られた人びとの親族構造を解明する。

また、現代日本人のゲノムに12%程度みられる縄文由来のDNAの意味を考えると、古墳時代以降も列島外からのDNAが加わる必要性が想定されているため、日本列島へ人類が渡ってくる経由地である朝鮮半島南部から出土する三国時代を中心とした古人骨のDNAと年代・同位体比分析を行って、古墳時代人骨と比較する。

2. 今年度の研究計画

最終年度は、東日本における渡来系弥生人の出現時期を調べるための調査を神奈川、長野、群馬で行う予定である。

3. 今年度の研究経過及び成果

最終年度の2022年度は、昨年度まで集めていた人骨資料のうち、未測定だったものの分析・調査に加えて、中部・関東南部への渡来系弥生人の進出時期を調べるために、新たに長野（塩崎遺跡群）、群馬（八東脛洞窟遺跡有馬条里遺跡ほか）、神奈川（池子遺跡）の弥生人骨の調査を行った。また縄文時代は岩手県蝦島貝塚出土人骨のミトコンドリアDNA分析・核ゲノム分析、古墳時代は鳥取県内古墳出土人骨の継続調査を行った。これらの調査結果は、2023～2024年度に発表予定である。

2022年度は、論文3本、研究ノート・調査報告11本、学会発表3本により調査成果を発信するとともに、資料提供者を対象とした報告会を、熊本、米子、鹿児島において実施した。時代ごとの主な成果は以下の通りである。

- ① 縄文時代人骨については、岩手県蝦島貝塚から出土した縄文晩期の人骨を対象に、DNA分析を行ったところ、これまで行われてきた形態小変異に基づいて復元された親族構造とは合わない場合のあることが明らかになった。
- ② 弥生時代については、埴原和郎の二重構造モデルに基づく渡来系弥生人の成立仮説を検証した結果、中国北部系の人びとの渡来を想定しないと渡来系弥生人が成立しない可能性など、より複雑なプロセスが存在したことが明らかになった。また関連して6300年前の韓半島南部には、渡来系弥生人に類似した核ゲノムをもつ前期新石器時代人がいたことを明らかにした。
- ③ 形質人類学的に西北九州弥生人といわれてきた人びとには、DNA分析の結果、在来（縄文）系弥生人と、渡来系弥生人と在来（縄文）系弥生人との混血によって生まれた2者があることを明らかになった。またその初現は、これまで紀元前後がもっとも古かったが、前3世紀までさかのぼることを明らかにした。さらに西北九州だけでなく、熊本など九州中部にも存在することを明らかにした。
- ④ またこれまで古人骨を対象としたDNA分析が考古学的な調査によって得られる学際的な研究に与える成果としては、親族関係の復元が主流であったが、本研究によって、DNA分析結果と縄文系や弥生系といった土器の系統との間に関連がある可能性を明らかにした。
- ⑤ さらに鳥取市青谷上寺地遺跡から出土した2世紀後半の人骨、約30体のDNA分析を行ったところ、親族関係がほとんど認められないことが明らかになった。これは、2世紀の日本海沿岸には、通常の水田稲作民の村とは異なり、都市的住民から構成される集落が存在していたことを明らかにした。
- ⑥ 古墳時代については、DNA分析の結果、1つの石棺内に葬られた多人数埋葬のなか、異母姉妹を埋葬した例を、古墳中期の岡山県久米三成古墳で初めて確認した。
- ⑦ 九州北部と沖縄との間で弥生時代前期に始まった、貝輪の素材となる大型巻き貝の交易は、前8世紀に始まっていたことを明らかにした。

これらの研究成果は、国立歴史民俗博物館研究報告第218集、219集、第229集、第234集、第239集、第240集に集約して報告済みである。また2023年9月末には第242集を刊行予定である。

【論文】

藤尾慎一郎・篠田謙一・坂本稔・瀧上舞「考古学データとDNA分析からみた弥生人の成立と展開」国立歴史民俗博物館研究報告第237集、2022.11.30

木下尚子「弥生貝交易の中継地—鹿児島県高橋貝塚のゴホウラ分析から」国立歴史民俗博物館研究報告第237集、2022.11.30

Yasuhiro YAMADA 2022: Archaeological and Anthropological views of Jomon society: methods and practices. *Anthropological Science* 130-1.

【研究ノート・調査報告】

藤尾慎一郎・瀧上舞・坂本稔「熊本大学医学部所蔵弥生時代の人骨の年代学的調査—笹尾遺跡・神水遺跡・畑中遺跡・大坪貝塚—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第240集、pp.331-350、2023.3

- 清家章・坂本稔・瀧上舞「熊本大学医学部所蔵熊本県内古墳出土人骨の年代学的調査—辻古墳・経塚古墳・向野田古墳・千崎古墳群・桐ノ木尾ばね古墳・成合津2号墳・中大村石棺・下大村石棺・大鼠蔵山古墳・瓜山横穴墓—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第240集, pp.55-60.2023.3
- 木下尚子・坂本稔・瀧上舞「鹿児島県西之表市上能野貝塚出土獣骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第240集, 2023.3
- 木下尚子・坂本稔・瀧上舞「沖縄県内の貝塚時代後期の人骨ならびに貝殻集積の年代学的調査—2021年度の調査—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第240集, 2023.3
- 藤尾慎一郎編『考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明-2020年度の調査』国立歴史民俗博物館研究報告第237集, p.186頁, 国立歴史民俗博物館, 2022.11
所収調査報告
- 神澤秀明・角田恒雄・安達登・篠田謙一・濱田竜彦「鳥取県内古墳群出土人骨のミトコンドリアDNA分析 I—越敷山古墳群・日下古墳群・向原古墳群—」
- 清家章・坂本稔・瀧上舞「広島県府中市山ノ神1号古墳の年代学的調査」
- 藤尾慎一郎・坂本稔・瀧上舞「福岡県行橋市長井遺跡出土弥生人骨の年代学的調査」
- 神澤秀明・角田恒雄・安達登・篠田謙一・熊本大学医学部所蔵人骨のミトコンドリアDNA分析」
- 木下尚子・坂本稔・瀧上舞「鹿児島県南さつま市高橋貝塚の年代学的調査」
- 木下尚子・坂本稔・瀧上舞「鹿児島県宝島大池遺跡A地点の年代学的調査」
- 坂本稔・瀧上舞「IntCal20とMarine20による「ヤポネシアゲノム」較正年代の再計算」
- 藤尾慎一郎「考古学データとヤポネシア人」『考古学ジャーナル』779, pp.5-9
- 藤尾慎一郎「数値年代とDNAがもたらす これからの弥生文化研究」『考古学雑誌』第150巻第2号, pp.55-60.
2023年3月

【学会発表】

- 第76回日本人類学会大会 研究発表 山田康弘・神澤秀明・角田恒雄・安達登・篠田謙一「岩手県蝦島貝塚出土の縄文人骨を対象とした考古学と人類学のコラボレーション」京都大学
令和4年度九州考古学会総会 研究発表 九州大学元岡キャンパス 2022年11月27日 要旨集pp.26-35. 藤尾慎一郎・篠田謙一「ゲノムからみた弥生時代人の多様性」

【研究会】

- 2022年6月26日 第9回考古班会議 沖縄
2023年1月22日 第10回考古班会議 米子

【試料提供先への報告会】

- 熊本報告会 「熊本大学医学部保管の縄文・弥生・古墳時代人骨」2022年11月28日, 熊本県立図書館
篠田 謙一「DNA分析の成果」
山田 康弘「縄文時代人骨の調査成果」
藤尾慎一郎「弥生時代人骨の調査成果」
清家 章「古墳時代人骨の調査成果」

米子報告会 「鳥取県内古墳出土人骨の年代学的調査とDNA分析」2023年1月21日, 米子市文化ホール

- 清家 章「古墳出土人骨の親族構造研究とDNA分析」
濱田 竜彦「鳥取県内古墳出土人骨分析資料の概要」
瀧上 舞・坂本稔「鳥取県内古墳出土人骨の年代学的調査」
神澤 秀明・篠田 謙一「鳥取県内古墳出土人骨のDNA分析」

鹿児島報告会 2023年2月11日, 鹿児島市国際交流センター

- 篠田 謙一「南九州古人骨のゲノム解析結果」
藤尾慎一郎「弥生文化研究と核ゲノム」
木下 尚子「貝塚時代後期の人と物の動き」

【新聞記事】著作権の関係で誌面を載せられない場合は、引用8でお願いします。

4. 研究組織

【研究代表者】

藤尾慎一郎 本館研究部・教授 研究総括, 弥生時代人骨の考古学的解析

【研究分担者】

木下 尚子 熊本大学・名誉教授 奄美・沖縄出土人骨の考古学的解析
 清家 章 岡山大学・教授 古墳時代人骨の考古学的解析
 山田 康弘 東京都立大学・教授 縄文時代人骨の考古学的解析
 濱田 竜彦 鳥取県地域づくり推進部文化財局鳥取弥生の王国推進課青谷上寺地遺跡整備室課長補佐 中国地方の
 先史時代人骨

【研究協力者】

坂本 稔 本館研究部・教授 炭素14年代測定
 瀧上 舞 国立科学博物館 人類研究部研究員 食性分析・年代測定（12月より）

(11) 新学術領域研究（研究領域提案型）

集団の複合化と戦争
 2019～2023年度
 （研究代表者 松木 武彦）

(12) 学術変革領域（A）

遺跡出土木材の単年輪データに基づく暦年較正の高度化と炭素14年代
 輪年代法の確立
 2021～2022年度
 （研究代表者 箱崎 真隆）

1. 目的

本研究の目的は、日本産資料の暦年較正の高度化を見据えて、①植物利用遺構から出土した木材をもとに紀元1—3世紀の炭素14データを隙間なく獲得する、②同じ暦年の年輪を複数回測定して統計誤差を縮小し日本特有のウィグルをとらえる、③年輪年代法の統計解析を応用し「炭素14年輪年代法」を確立するという3点である。本研究では同じ暦年の年輪試料を繰り返し測定することで、通常±30から±20年の炭素14年代誤差を±10年ほどまで狭め、日本特有のウィグルを精密にとらえる。こうすることで、質の高い炭素14標準年輪曲線を構築し、年輪年代学的解析による誤差0年での年代決定を実現する。本研究が成功すれば、あらゆる時代において質の高い単年輪データを整備する機運が生まれ、炭素14年輪年代法が日本のみならず世界的に発展していくことが期待される。

2. 今年度の研究計画

本年度は、紀元1—3世紀の年輪をもつ佐渡島の低湿地遺跡から検出された植物利用遺構の出土木材を分析して、単年輪炭素14データを獲得する。この試料は酸素同位体比年輪年代法によって全ての年輪の暦年代が確定している。この試料において同じ暦年の年輪を繰り返し測定して誤差を縮小し、細かなウィグルを復元する。炭素14は極微量であるため、1度の測定では大きな誤差が伴う。同じ暦年の年輪には、理論上、同じ量の炭素14が含まれるので、繰り返し測定し、データを平均することで誤差を小さくできる。紀元1—3世紀の単年輪を3度繰り返し測定し、そのデータを元に通常の測定では把握できない細かな炭素14挙動（ウィグル）を復元する。このようにしてクオリティを高めたデータを次期IntCalの基盤データにするほか、炭素14の時系列変動に基づく年輪年代測定の標準年輪曲線とする。

3. 今年度の研究経過及び成果

2年間の研究期間において、90年輪の3回繰り返し測定が完了し、クオリティの高い炭素14データが獲得できた。委託した測定機関の都合等で、予定していた全ての年輪の測定はできなかったが、新たな科研費の獲得によって継続する予定である。すべてのデータが揃ったのが2年目の年度末であったため、目的の③までを達成することはできなかったが、非常に質の高い重要な年代の単年輪炭素14データを獲得できたので、これを元に通常の測定では把握できない細かな炭素14挙動（ウィグル）の復元を今後目指していく。本研究のクオリティの高いデータは次期IntCalの基盤データにするほか、炭素14の時系列変動に基づく年輪年代測定の標準年輪曲線とする予定である。本研究の計画と途中経過をまとめ、日本文化財科学会第39回大会で発表した結果、ポスター賞を受賞した。また、考古学ジャーナルにも、本研究に関連する論文を発表した。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎箱崎 真隆 本館研究部・准教授

(13) 基盤研究 (A)

過去3万年の極端気候・極端災害史の精密編年に向けた新しい年輪年代法の基盤研究
2020～2024年度
(研究代表者 箱崎 真隆)

1. 目的

日本の年輪年代法は2010年代に飛躍的な発展を遂げ、従来法では過去3000年間であった年代測定範囲が過去5100年間まで拡張された。その背景には「酸素同位体比年輪年代法」と「炭素14スパイクマッチング」の確立・実用化がある。本研究は、応募者がこれまでの研究で集めた過去3万年間の樹木年輪試料を用いて、1年単位の酸素同位体比分析および放射性炭素（炭素14）分析を網羅的に実施し、そのデータを解析することにより、日本列島周辺で起きた極端災害・極端気候を精密に編年する。さらには、最終氷期最寒冷期(LGM)の気候を1年～数百年のスケールで復元し他の時代との共通点や相違点を把握する。

2. 今年度の研究計画

本年度は、酸素同位体比標準年輪曲線の構築・延長が遅れている関東の現生木、遺跡出土木材のサンプリングおよび酸素同位体比分析を優先して実施する。また、北日本において、酸素同位体比変動に基づく過去1600年間の気候復元を進めるため、データの追加獲得を実行する。新型コロナウイルス感染症のために実施できていない「7.3ka 鬼界アカホヤ噴火発生年」の決定に向けた屋久島での埋没木調査を実施する。4.2-4.3kaイベントの精密復元を目指して、三瓶小豆原埋没林試料および福井県若狭黒田・中山埋没林試料の酸素同位体比分析を実施する。昨年度に引き続き、北半球標準暦年較正曲線IntCalの基盤データを日本産および韓国産樹木の網羅的な炭素14分析によって獲得する。以上を計画した。

3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの影響によって長期出張が不可能であった。このため、予定していた屋久島での「7.3ka鬼界アカホヤ噴火発生年の決定」に向けた埋没木調査、「4.2-4.3kaイベントの精密復元」に向けた若狭三方縄文博物館収蔵スギ埋没木のサンプリングは、次年度に繰り越しとなった。一方で、東京都および千葉県の実生木を多数入手することができた。時代・地域的に重要な新規サンプルの獲得ができ、酸素同位体比標準年輪曲線の時空間的空白が拡充される見通しが立った。分担者の木村勝彦によって、紀元前の長期にわたる酸素同位体比標準年輪曲線が公開され、縄文時代および弥生時代の年代決定が可能となった。代表者の箱崎、分担者の三宅美沙、坂本稔によって、過去1万年間の単年輪炭素14データの獲得は着実に進んでおり、次期較正曲線の高精度化へ貢献できる見通しが立った。単年輪炭素14年代測定の研究状況について、日本文化財科学会で発表した結果、第16回ポスター賞を受賞し、文化財科学の分野で高い評価を得た。また、分担者の三宅は年輪年代学の国際的な賞「José A. Boninsegna Frontiers in Dendrochronology Award」(2022)を受賞した。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎箱崎 真隆 本館研究部・准教授

木村 勝彦 福島大学共生システム理工学類・教授

三宅 美沙 名古屋大学宇宙地球環境研究所・准教授

坂本 稔 本館研究部・教授

(14) 基盤研究 (B)
 文化の主体的継承のための民俗誌の構築—マルチメディアの活用と協働作業を通じて
 2018～2022年度
 (研究代表者 川村 清志)

1. 目的

本研究の目的は、日本の地域社会が失いつつある生活文化の諸相を持続的に継承し、活用するための基盤となる、マルチメディアを用いた民俗誌を作成することにある。

この研究の意義として、①人類学、民俗学の民俗誌記述における理論的、倫理的な課題の克服、②現代的メディア状況に対応した民俗誌実践の試み、③地域社会への持続的な文化支援という側面を持っている。民俗誌は、対象とする社会の生活文化を全体的に記録することを目的としている。本研究では、日本の地域社会において研究者と現地の人びとの対話と協働を通して、多様な価値観と視点を内包した、自己表象としての民俗誌を共に創出する。文字情報はもちろん、画像や動画を用いてネット上での公開も視野に入れた民俗誌であり、人びと自身が主体的に選択し、積極的に継承、活用しようとする文化についての更新可能な—メディアを通じて文化実践を上書できる—記録の構築を目指す。

2. 今年度の研究計画

2021年度はコロナ禍のために、予定していたフィールドワークと映像撮影の多くが実施できなかった。今年度も予断を許さない状況にあるが、可能な限り各調査地における協働調査を実施する方向で計画を立てていく。以前から調査をしていた地域では、現地との協働作業が断続的にはあれ行えたことで、その成果の一端を継続して示しつつある。今年度は、これらの先行地域での成果を基礎としながら、他地域においても同様のコラボレーション体制を構築しながら具体的な調査活動を継続していきたい。

まず、先行的な調査地として石川県輪島市において、これまでの調査と成果を基礎として、祭りのフォトエスノグラフィー『石川県輪島市皆月山王祭 祭日編』の補完調査と現地での協働作業を継続していく。『祭日編』では文字通り祭りの当日に関するフォトエスノグラフィーの作成を、地元の青年会とそのOBとの協働作業によって遂行した。これを受けて過疎化による地域の空洞化が進む今日的状況を活写するために、地域を離れた青年会員たちの映像民俗誌の調査を彼らの協力のもとに実施する。同じく先行的な地域である宮城県七ヶ浜町では、地域の団体や東日本大震災以後のNPO活動に従事していた人たちとの協働作業のもとに、震災以後の文化復興に関するビジュアル民俗誌の制作を進める。

また、一昨年の調査からほぼ滞っていた宮城県気仙沼市については、地域の文化として表象される虎舞と鹿踊りに注目しつつ、それらの文化財化に尽力したキーパーソンとの協働作業のもとにサステイナブルな文化継承のあり方について、夏から秋の調査を予定している。同様に沖縄県宮古島でも、地域の伝統的な祭祀組織の危機的状況に際して、積極的な提言を行い、情報発信を行っているキーパーソンとの協働作業のもとに、研究者のポジションリティを活かした文化支援のあり方を模索していく。さらに兵庫県明石市については、秋から冬にかけて、現地と研究者を仲介するコラボレーター存在に注目し、その社会的文化的な特質をインタビューと映像記録にまとめていく方向で、調査を継続していく。

なお宮古島に関しては研究分担者の内田順子が、鹿児島県屋久島については柴崎茂光が、各々の調査経験を活かしつつ、協働作業による民俗誌の調査活動に従事する。また、同県奄美地方については、岡田浩樹がデジタルデバイスを用いた広域にわたる調査実践を継続する予定である。

3. 今年度の研究経過及び成果

最終年度もコロナ禍のために、当初、予定していた調査地での研究を十分に実行することができなかった。時期によっては限定的な現地調査もできたが、対象とする文化資源である祭礼や民俗芸能の記録映像は、行事そのものが中止となったために撮影できなかった。そこで、これまでのインタビューや映像記録をまとめる作業と、予定していた調査地域で地域社会との協働による文化資源の生成となる事例の整理を行った。

まず、石川県の事例については、輪島市七浦公民館にてこれまでの研究調査の一環を紹介した。また、地元出身の元小学校教員からこれまで収集し、公民館に寄贈した種々の録音録画機器についての逸話と彼のライフコースについての聞き取りの記録化を行っている。また、同県珠洲市での地域文化の再創造活動にも本研究との目的と合致する調査研究を行った。

宮城県気仙沼市での調査については当初予定していた、同市早稲谷地区の鹿踊りが再開されなかったため、その記録映像を撮ることができなかった。そこで、この鹿踊りの文化財への指定に尽力した、元県職員のS氏の聞き取り調査と同保存会の前会長へのインタビューを中心とした映像記録の編集を行い、インタビューの文字起こしを実施した。明石市の事例では、3年ぶりに行われた祭礼の調査を行い、かつての祭礼の写真資料と映像資料のデジタル化を進めた。また、この獅子舞保存会の前会長のK氏からのインタビューを行い、文字起こしを進めている。

最後に沖縄県の事例については、感染状況が好転しない宮古島での調査が不可能であったため、沖縄県の写真家で宮古島の祭礼の記録写真でも知られる比嘉康雄のアーカイブズ作業を促進し、それらを通じて、沖縄文化の記録と保存に携わる写真家たちのシンポジウムの記録映像を撮影し、編集作業を行った。今後は以上の事例をまとめて映像記録を作成しつつ、協働の民俗誌を検証する論文を作成する予定である。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎川村 清志 本館研究部・准教授
岡田 浩樹 神戸大学・国際文化学研究所・教授
内田 順子 本館研究部・教授

(15) 基盤研究（B） 古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開 2019～2022年度 (研究代表者 三上 喜孝)

1. 目的

本研究課題は、日本列島と朝鮮半島の漢字文化の展開と変容の実態を、石碑や墓誌、鐘銘や印章などの金石文を素材に考察することを目的とする。本研究課題が対象とする古代の日本列島や朝鮮半島は、中国の漢字文化が受容され、それがさらに地域社会の隅々まで浸透していく時代であった。漢字は、官僚や豪族による行政文書の作成という政治利用だけでなく、仏教・儒教などの思想や儀礼の広まりにおいても大きな役割を果たした。こうした実態を知る手がかりとしては、石や金属器に刻まれた金石文が重要な資料となるが、これまで金石文を分析する手法が韓国と日本で共有されていなかったため、その比較研究が難しかった。そこで本研究課題では、古代日本と朝鮮の金石文の比較研究の手法を開発し、さらには漢字文化とそれに付随する思想や儀礼が東アジアの各地域社会にどのように浸透していったか、その実態を、金石文を通じて解明することを主眼とする。

2. 今年度の研究計画

調査カードを作成し、対象となる時期（6～11世紀）の日本と朝鮮半島の金石文についてこれまでの積文や研究を集成する。

韓国において、資料調査を行う。とくに、韓国の国立中央博物館や国立慶州博物館をはじめとする博物館所蔵の6～11世紀の金石文のうち、とくに問題となる金石文について可能な限り実見調査を行う。調査の際には韓国の研究協力者にも同行してもらい、金石文解読や調査手法の共有化をはかる。

国内（国立歴史民俗博物館や東京大学史料編纂所）で研究会を複数回開催し、積文の検討や日韓金石文資料の比較検討、さらには研究発表を行い、研究分担者・研究協力者間で意見交換を行う。

3. 今年度の研究経過及び成果

今年度も、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、韓国における資料調査を行うことができなかった。その代わりに、中国や韓国の研究者を含めたオンラインによる研究会を4回実施した。

[研究経過]

第1回研究会（開催形態：オンライン）

日時：2022年5月24日（火）15時～17時

発表者とタイトル：稲田奈津子「新出高麗買地券の紹介と訳読」

概要：中国に起源する買地券（土地神から墓地を買いとる契約書を記した金石文資料）は、これまでに朝鮮では3例、日本では2例が知られている。朝鮮の3例のうち、ひとつは百済の武寧王陵誌石であり、残り2例は高麗時代のものであるが、このほどもう1例、高麗の買地券の存在が報告された。そこで新出の高麗買地券に

ついて紹介するとともに、精細な写真をもとに釈読を試みた。あわせて宮ノ本遺跡（福岡県太宰府市）出土の買地券についての調査報告もおこなった。

第2回研究会（開催形態：オンライン）

日時：2022年8月2日（火） 15時～17時

発表者とタイトル：王海燕「浙江・江蘇両省の買地券事例の紹介と釈読」

概要：浙江省・江蘇省南部に出土した買地券に着目し、浙江の4例、江蘇の7例を中心に挙げた。11例には後漢・呉（三国）・東晋・南朝・唐・五代・明各時代のものがあり、典型的な買地券事例だけでなく、売地券や、墓誌・買地複合事例も含まれる。それぞれの画像データに基づき、釈読を試みた。

第3回研究会（開催形態：対面とオンライン併用）

日時：2022年9月13日（火） 午前10時～午後3時

会場：東京大学史料編纂所1階演習室

発表者とタイトル①：植田喜兵成智「新羅文武王碑の性格に関する試論」

概要：新羅の文武王碑は、古くからその存在が知られていたが、断碑であること等から史料として十分に活用されてこなかった。現在の碑文の現状では、損耗が激しく、新たに文字を判読することは困難とみられる。本報告では、ソウル大学中央図書館古文書資料室所蔵する20世紀初頭にとられた拓本に注目し、その調査結果をもとに、新たな釈文を提示し、そのうえで碑文の性格について論じた。

発表者とタイトル②：橋本繁「忠州高句麗碑の新釈文と年代」

2019年に高句麗碑の再調査が行われ、資料集が刊行されるとともに新たな釈文が出された。全面上段に年紀を読みとるなどしたこの新釈文に基づいて、広開土王代の397年とする新たな説が出されている。本報告では、釈文について再検討を加えて、新たな年代観を示すとともに、内容についても新たな知見を加えた。

第4回研究会（開催形態：対面とオンライン併用）

日時：2023年1月25日 15時30分～19時

会場：学習院大学東洋文化研究所会議室

報告①：羅有晶（韓国外国語大学校史学科）「『広開土王陵碑』旧民守墓人烟戸に見られる高句麗の編戸様相」

報告②：安正煥（ソウル市立大学校国史学科）「張撫夷墓から出土した銘文傳を通して見た墓主の性格—楽浪・帯方郡故地の中国系住民の社会についての検討—」

報告③：鄭華升（ソウル市立大学校国史学科）「4～5C 中国系移住民の官号自称の事例とその背景—雲南兩爨碑と楽浪・帯方郡故地の中国式古墳に見られる事例を中心に—」

総合討論とコメント：金宗燮（ソウル市立大学校国史学科）

植田喜兵成智（学習院大学東洋文化研究所）

稲田奈津子（東京大学史料編纂所）

【研究成果】

今年度も昨年度に引き続き、韓国での資料調査については、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、やむなく実施を断念せざるを得なかった。代わりに、オンラインによる国際学会会議への参加・発表や研究会の実施を積極的に行った。

資料収集については、韓国の古代～高麗前期までの金石文を中心に、基礎的なデータの収集と入力につとめた。今年度の研究業績は、以下の通りである。

【書籍】

- ・稲田奈津子・王海燕・榊佳子編著『黄泉の国との契約書—東アジアの買地券』（勉誠出版、2023年3月）
- ・姜尚中総監修『アジア人物史第2巻 世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア』集英社、2023年2月（植田喜兵成智による分担執筆「金庾信」「祢軍」「黒齒常之」「薛仁貴」543-548頁、559-561頁）

【論文】

- ・赤羽目匡由「『開仙寺石燈記』の基礎的研究」（『メトロポリタン史学』18,2022年12月、53～78頁）
- ・稲田奈津子「京都大学附属図書館所蔵『正倉院東大寺宝篋』について」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析』）

- センター通信』98号, 1～9頁, 2022年10月)
- ・稲田奈津子「藤原兼通と兼家—執念の兄弟確執—」(新古代史の会編『人物で学ぶ日本古代史3 平安時代編』吉川弘文館, 193～199頁, 2022年12月10日)
 - ・稲田奈津子「国際都市 平城京」(岡美穂子責任編集『つなぐ世界史 第1巻 古代・中世』清水書院, 78～83頁, 2023年)
 - ・Ueda, Kiheinarichika. “The Genealogy in the Koguryō Diaspora’s Epitaph.” *International Journal of Korean History* 27-2 (2022), 31-71. <査読有>
 - ・植田喜兵成智「高欽徳墓誌にみえる「渤海」と「建安州都督」の意味」李成市先生退職記念論集編集委員会『東アジアにおける朝鮮史の展望』汲古書院, 2023年3月, 335-361頁 <査読無>
 - ・畑中彩子「縣犬養橋三千代—古代のスーパーキャリアウーマン」新古代史の会編『人物で学ぶ日本古代史2 奈良時代編』2022年10月1日, 査読無し, P13 - 23頁
 - ・畑中彩子「藤原時平と忠平—才気走る若き政治家と温厚で策士な政治家」新古代史の会編『人物で学ぶ日本古代史3 平安時代編』2022年12月10日, 査読無し, P120 -125頁
 - ・堀裕「陸奥の仏教文化」吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編『シリーズ地域の古代日本 陸奥と渡島』株式会社KADOKAWA, 2022.6.15. 173～201頁
 - ・堀裕「菩提僊那—インドと唐の文化の伝来—」(新古代史の会編『人物で学ぶ日本古代史2 奈良時代編』吉川弘文館, 2022.10.1, 139～141頁)
 - ・三上喜孝「古代の文字文化とジェンダーに関する覚書 —東アジアと地域社会の視点から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』235, 2022年9月, 117～124頁, 査読有
 - ・三上喜孝「墨書土器とは何か」吉村武彦・加藤友康・川尻秋生・中村友一編『墨書土器と文字瓦 —出土文字史料の研究—』八木書店, 2023年1月, 35～50頁, 査読無
 - ・三上喜孝「日本古代木簡の型式分類と機能的分類」『木簡と文字』29, 韓国木簡学会, 2022年12月, 61～75頁, 査読有, 韓国語
 - ・三上喜孝「出土文字資料の集成的研究 平泉出土文字資料へのアプローチ (2) 折敷再利用木簡」『平泉学研究年報』3, 2023年3月, 査読無
 - ・橋本繁「咸安城山山城木簡の「王私」と「城下麦」」『新羅史学会』54, 2022年4月, 査読有り, 199-221頁, 韓国語
 - ・橋本繁「慶山所月里木簡の性格に対する基礎的検討—新羅村落文書との比較および形態的特徴を中心に」『木簡と文字』29, 2022年12月, 査読有り, 187-206頁, 韓国語
 - ・橋本繁「忠州高句麗碑の新判読と年代」『韓国古代史探求』42, 2022年12月, 査読有り, 485-516頁, 韓国語
 - ・橋本繁「永川・青堤碑貞元銘よりみた統一新羅の王室直轄地支配と力役動員」李成市先生退職記念論集編集委員会編『東アジアにおける朝鮮史の展望』汲古書院, 2023年3月, 査読無し, 363-382頁

【口頭発表】

- ・稲田奈津子「朝鮮と日本の買地券」(東京大学ヒューマニティーズセンター第69回オープンセミナー「黄泉の国との契約書—東アジアの買地券—」, 2022年6月3日 オンライン)
- ・稲田奈津子「平城京の国際性」(招待講演) 国立臺灣大學日本研究中心 第九屆全國研究生研習營「人文與社會科學對話的日本研究」(2022年9月17日 點: 國立臺灣大學博雅教學館301教室&オンライン)
- ・植田喜兵成智「文武王碑にみえる新羅の国際認識」第23回遼金西夏史研究会大会, 於福岡大学中央図書館多目的ホール, 2023年3月11日～12日, 発表日: 2023年3月12日
- ・三上喜孝「日本古代木簡の型式分類と機能的分類」韓国木簡学会第16回国際学術大会「韓・中・日古代木簡の名称に対する総合的検討」, 2022年9月23日, 於韓国・中央大学(オンライン報告)
- ・三上喜孝「出土文字資料の集成的研究 平泉出土文字資料へのアプローチ (2) 折敷再利用木簡」岩手大学平泉文化研究センター主催第3回平泉学研究会, 2023年2月4日(土), 於岩手大学北桐ホール
- ・橋本繁「新羅の地方支配と木簡—大邱・八莒山城木簡の基礎的検討を中心に」慶北大学校人文学術院HK+事業団第5回国際学術会議『木簡に反映された古代東アジアの法制と行政制度』2023年1月29日～2月2日, 韓国・済州島

【書評】

- ・赤羽目匡由「書評 近藤剛『日本高麗関係史』」(『歴史学研究』1031, 2023年1月, 58～61頁)

【翻訳】

・橋本繁（共訳）『木簡からみる日本古代人の日常』周留城出版社，ソウル，2022年9月（奈良文化財研究所『木簡 古代からの便り』岩波書店，2020年の韓国語訳）

4. 研究組織（◎は研究代表者）

赤羽目匡由 東京都立大学大学院人文科学研究科・准教授 稲田奈津子 東京大学史料編纂所・准教授

植田喜兵成智 学習院大学東洋文化研究所・助教

橋本 繁 韓国・慶北大学人文学院HK研究教授（研究協力者）

畑中 彩子 東海大学文学部・准教授

堀 裕 東北大学大学院文学研究科・教授

◎三上 喜孝 本館研究部・教授

(16) 基盤研究（B） 西遷・北遷東国武士の社会的権力化 2019～2022年度 （研究代表者 田中 大喜）

1. 目的

本研究の目的は、13世紀後半～14世紀にかけて顕著になった、西遷・北遷と呼ばれる東国武士の西国や東北地域の所領への移住の実態について明らかにすることにある。東国武士は、日常的に交流してきた在来諸勢力との社会的合意を形成することによって、西遷・北遷先の所領に形成されていた地域社会を統合・編成する主体（権力）になることができた。本研究では、こうした現象を西遷・北遷東国武士の社会的権力化と捉え、東国武士の西遷・北遷という歴史事象の本質と理解し、その実態を究明する。

その際、本研究では西遷・北遷東国武士と在来諸勢力とを相互規定的な関係にあるものと捉えるため、文献資料・出土遺物・石造物・仏像等、両者の多様な諸資料を広く収集・分析し、文献史学・考古学・美術史学・民俗学・歴史地理学による総合的研究として進める。これにより、両者の社会的合意の内実を立体的に究明し、東国武士の西遷・北遷の歴史像を実証的に一新する。

2. 今年度の研究計画

7月中に、国立歴史民俗博物館において昨年度新型コロナウイルスの感染拡大のために実施できなかった広島県三原市の資料調査に向けた研究会を開催する。また、この研究会では、昨年度実施した佐賀県小城市と新潟県胎内市での現地調査成果についても研究分担者・研究協力者全員で検討し、情報を共有する。

8月から12月にかけて、宗教資料班・文献資料班・歴史地理班・考古班・民俗班ごとに安芸国沼田荘域および越後国奥山荘域の現地調査を行う。宗教資料班は、沼田荘・奥山荘域の中世石造物と中世仏像を調査し、金石文・胎内銘・仏像様式等から当該地域の東国武士と在来諸勢力の動向を抽出する。歴史地理班は、沼田荘・奥山荘域の近世地誌・絵図、地方文書、明治期地籍図から抽出した情報をもとに現地での聞き取り調査と水利調査を進める。これらにより、両地域の東国武士・在来諸勢力双方の拠点および地域開発に関わる基礎データを集積する。考古班は、沼田荘・奥山荘域の中世城館・集落・集散地遺跡の出土遺物を悉皆調査し、当該地域の城館・集落・集散地の消長を抽出する。そして、文献資料班は、刊本から安芸小早川氏と越後和田氏に関わる文献資料を抽出・整理する作業を進める。

1月から2月にかけて、班ごとに調査データをフォーマットに入力して整理する作業を進める。また、整理した作業データは研究代表者へ送り、集約する。

3月中に、国立歴史民俗博物館において研究会を開催する。班ごとに昨年度と今年度の調査成果を報告し、研究分担者・研究協力者全員でこれを検討して、情報の共有化を図る。また、資料調査データの組織的運用・公開体制の構築に向けた検討も行う。

3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は、8月に小早川氏が西遷した安芸国沼田荘故地である広島県三原市での現地調査に向けた研究会を国立歴史民俗博物館で開催し、研究分担者・研究協力者全員で情報を共有した。そのうえで、9月～3月にかけて、宗教資料班・文献資料班・歴史地理班・考古班・民俗班ごとに現地調査を実施した。宗教資料班は沼田荘域の中世仏

神像の調査、文献資料班は沼田荘域の近世～近代文書・近世絵図の調査、歴史地理班と民俗班は沼田荘域の水利灌漑調査と聞き取り調査、考古班は草戸千軒遺跡の出土遺物の調査を、それぞれ実施した。

調査データは班ごとにまとめて集約し、3月に国立歴史民俗博物館で開催した研究会で研究分担者・研究協力者全員で検討・共有した。この研究会では、資料調査データの組織的運用・公開体制の構築に向けた検討も行った。また、3月には三原市でシンポジウム「中世沼田荘を解き明かす―現地調査中間報告―」を開催し、今年度の現地調査成果を市民に向けて公表した。

なお、三原市での現地調査が予想以上に進展したため、越後国奥山荘故地である新潟県胎内市で行う予定だった現地調査は見送ることとした。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

【研究分担者】

- ◎田中 大喜 本館研究部・准教授
- 井上 聡 東京大学史料編纂所・准教授
- 貴田 潔 静岡大学人文社会科学部・准教授
- 黒嶋 敏 東京大学史料編纂所・准教授
- 神野 祐太 神奈川県立歴史博物館学芸部・学芸員
- 鈴木 康之 県立広島大学地域創生学部・教授
- 高橋 典幸 東京大学大学院人文社会系研究科・教授
- 松田 陸彦 本館研究部・准教授
- 村木 二郎 本館研究部・准教授
- 湯浅 治久 専修大学文学部・教授
- 渡邊 浩貴 神奈川県立歴史博物館学芸部・学芸員

【連携研究者】

- 荒木 和憲 九州大学大学院人文科学研究科・准教授
- 後藤 真 本館研究部・准教授

【研究協力者】

- 池谷 初恵 伊豆の国市教育委員会・文化財調査員
- 小野 正敏 本館・名誉教授
- 栗木 崇 熱海市教育委員会・学芸員
- 佐々木健策 小田原市文化財課・係長
- 田久保佳寛 小城市教育委員会・係長
- 竹下 正博 佐賀城本丸歴史館・課長
- 土山 祐之 本館研究部・プロジェクト研究員

(17) 基盤研究（B） 格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築 2020～2022年度 (研究代表者 小倉 慈司)

1. 目的

本研究は、最新の写本研究を踏まえて『類聚三代格』と『延喜式』という9～10世紀の基本史料テキストに再検討を加えることにより、古代社会を広い視野から捉え直し、その展開過程の解明を図ることを目標とする。

『類聚三代格』と『延喜式』は古代の法制である律令格式のうちの「格」と「式」にあたるが、これまで写本研究が充分になされないまま本文利用がなされてきた。近年進んだ両史料の写本研究を踏まえ、新たな本文校訂を進めつつ、それを踏まえて新たな古代社会像の再構築をめざす。9～10世紀は、以前より古代日本にとって大きな転換期であると考えられてきた。それは律令制の導入によって示された社会建設・制度設計が消化されつつ、実態に合わせて社会により適合的な形に修正され、独自の日本的な制度社会が形づくられる過程として理解されてきたが、近年では加えて民間の交易活動も注目されるようになり、東アジア、さらには東部ユーラシア世界のなかで日本列島を捉えようという視点も高まっている。また地震や火山噴火等、自然災害への関心も高まり、世界的な環境・社会変動のなかで考えていこうとする見方もある。しかしこのような研究状況にもかかわらず、研究の基礎となるべ

き文献史料については十分な再検討がなされないままになっている。

そこで本研究では、最新の写本研究を踏まえて『延喜式』と『類聚三代格』という基本史料テキストを再検討することにより、古代社会を広い視野から捉え直し、その展開過程の解明を図る。

2. 今年度の研究計画

本研究では『類聚三代格』と『延喜式』という2つの法制史料を主たる研究対象とする。

『類聚三代格』については、校訂本出版に向けて、巻1を中心に校訂方針の検討を進めてきた。本年度は巻2～8について素原稿を作成して検討を加え、入稿できるような形にまで整えていくことを目指す。

『延喜式』については、今年度は8巻分程度の校訂本文作成を目指す。またこれまでに進めてきた延喜式関係論文目録データベースのデータ追加を進める。さらに史料学をテーマとした講演会を開催する。

3. 今年度の研究経過及び成果

『類聚三代格』に関しては9月24日と3月18～19日に検討会を開催し、巻2～4素原稿についての検討と、翻刻・校訂方針等についての協議をおこなった。『延喜式』については8月18～19日に神宮文庫において史料調査を実施し、巻9・10の校訂本文を完成させ、また巻21・24・29・37・41についても校訂本文を作成した。現代語訳は巻39内膳について、英訳は巻37・39内膳について作成した。このうち巻41彈正台の校訂文については以前に作成した巻39内膳とともにデータベース「デジタル延喜式」にて公開し、巻9・10、巻21校訂文および巻37・39内膳の英訳については査読誌に投稿した。「デジタル延喜式」については既公開データの修正もおこなった。校訂・TEI・英訳については検討会やワークショップを実施した。また基幹研究プロジェクト歴博ユニット「延喜式のデジタル技術による汎用化」と共催して史料学の講演会を9月23日に開催し、3月に講演会記録集を刊行した。以上の詳細については、基幹研究プロジェクト歴博ユニット「延喜式のデジタル技術による汎用化」の活動報告も参照されたい。なお古代技術復元研究の参考として、10月22日に伊勢市にて調査を実施した。

以上の他、引き続き延喜式関係論文目録データベースの充実にも力を注いだが、4月にCiNii ArticlesがCiNii Researchに統合されたことにより、データベースの仕様を変更する必要が生じ、追加データの公開にはいたらなかった（年度末までに36,748件を追加し、合計114,658件としている）。2023年度早期に追加公開を目指したい。

【研究成果】

上述以外の研究成果は以下の通りである。

【著書】

仁藤敦史、『東アジアからみた「大化改新」』、吉川弘文館、2022年09月01日、ISBN:978-4-642-059558、224p.

遠藤慶太、『人物叢書 仁明天皇』、吉川弘文館、2022年10月31日、ISBN:9784642053105、272p.

小倉慈司編、『古代史料学講演会記録集』3、「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」・「延喜式のデジタル技術による汎用化」（人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」歴博ユニット）、2023年03月15日、59p.

吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編、『シリーズ地域の古代日本 東国と信越』、KADOKAWA、2022年04月04日、ISBN:978-4047036956、320p.

吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編、『シリーズ地域の古代日本 陸奥と渡島』、KADOKAWA、2022年06月05日、ISBN:978-4047036949、288p.

吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編、『シリーズ地域の古代日本 出雲・吉備・伊予』、KADOKAWA、2022年08月29日、ISBN:978-4047036987、272p.

小倉慈司・高田貫太編、『REKIHAKU』007（特集歴史の「匂い」）、国立歴史民俗博物館、2022年10月26日、ISBN:978-4-909658-91-3、111p.

吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編、『シリーズ地域の古代日本 畿内と近国』、KADOKAWA、2023年01月25日、ISBN:978-4047036970、272p.

吉村武彦・加藤友康・川尻秋生・中村友一編『墨書土器と文字瓦—出土文字史料の研究—』、八木書店、2023年01月日、ISBN:978-4-8406-2261-5、384p., pp.35-50

小倉慈司・西宮秀紀・吉田一彦編、『差別の地域史—渡辺村からみた日本社会（シリーズ宗教と差別3）』、法蔵館、2023年02月15日、ISBN:978-4-8318-5723-1、280p.pp.163-186

吉村武彦編（仁藤敦史執筆）、『律令制国家の理念と実像』八木書店、2022年05月06日、ISSN:978-4-8406-2257-8、482p., pp.159-182

岩城卓二ほか編（堀裕執筆）、『論点・日本史学』、ミネルヴァ書房、2022年08月20日、ISBN:9784623093496、

388p, pp.52-53

広瀬和雄ほか編（遠藤慶太執筆），『講座畿内の古代学Ⅳ 軍事と対外交渉』，雄山閣，2022年9月9日，ISBN:9784639027706，332p.，pp.144-161

高田宗平編（小倉慈司執筆），『日本漢籍受容史』，八木書店，2022年11月25日，ISBN:978-4-8406-2260-8，698p.，pp.159-181

新古代史の会編（井上正望・小倉慈司・中村光一執筆），『人物で学ぶ日本古代史』3 平安時代編，吉川弘文館，2022年12月10日，ISBN:978-4-642-06876-5，278p.

仁藤敦史ほか，『アジア人物史』2 世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア，集英社，2023年02月28日，ISBN:978-4-08-157102-4，728p.，pp.565-628

渋谷綾子・天野真志編（小倉慈司執筆），『古文書の科学—料紙を複眼的に分析する』，文学通信，2023年03月31日，ISBN:978-4-86766-004-1，240p.，pp.178-182

【論文】

遠藤慶太，伊勢と三重—「国」から「郡」へ—，地方史研究72-4，pp.4-7，地方史研究協議会，2022年08月01日.，ISSN:0577-754

中村光一，『続日本紀』「藤原良継薨伝」の再検討，奈良時代政治史研究1，pp.9-11，奈良時代政治史研究会，2022年09月03日

仁藤敦史，殯宮儀礼の主宰と大后—女帝の成立過程を考える—，国立歴史民俗博物館研究報告235，pp.25-58，国立歴史民俗博物館，2022年09月30日，査読有り，ISSN:0286-7400

三上喜孝，古代の文字文化とジェンダーに関する覚書—東アジアと地域社会の視点から—，国立歴史民俗博物館研究報告235，pp.117-124，国立歴史民俗博物館，2022年09月，査読有り，ISSN:0286-7400

三上喜孝，日本古代木簡の型式分類と機能的分類，木簡と文字29，pp.61-75，韓国木簡学会，2022年12月，査読有り

山口えり，古代の東国における陰陽師，アジア遊学278，pp.176-180，勉誠出版，2022年12月

【書評・その他】

仁藤敦史，重見泰著『日本古代都城の形成と王権』，日本史研究719，pp.61-67，日本史研究会，2022年07月，査読有り，ISSN:0386-8850

仁藤敦史，吉村武彦著『日本古代の政事と社会』，日本歴史892，pp.75-77，吉川弘文館，2022年09月.，ISSN:0386-9164

河合佐知子，新刊紹介『高群逸枝 1894-1964—女性誌の開拓者のコスモロジー—』，史学雑誌131-9，pp.100-101，史学会，2022年09月.，ISSN0018-2478

仁藤敦史，額田寺伽藍並条里図，文部科学教育通信540，p.2，ジァース教育新社，2022年09月26日.，ISSN:2187-2724

仁藤敦史，「大化改新」と「韓政」，本郷162，pp.17-19，吉川弘文館，2022年11月01日.，

遠藤慶太，行基を必要としたもの，近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会ニューズレター17，pp.1-2，近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会，2022年11月15日.，ISSN:2436-5343

小倉慈司，一代要記残簡—水戸黄門からの贈り物，文部科学教育通信547，p.2，ジァース教育新社，2023年01月09日.，ISSN:2187-2724

遠藤慶太，仁明天皇の時代—音楽史のなかで—，本郷163，pp.24-26，吉川弘文館，2023年01月01日

小倉慈司，岡田莊司著『古代天皇と神祇の祭祀体系』，神道宗教269，pp.167-174，神道宗教学会，2023年01月25日.，ISSN:0387-3331

小倉慈司，前白木簡は前で申したのか，桐墨14，pp.2-3，大東文化大学書道研究所，2023年3月

【講演・口頭報告】

早川万年，「語部は美濃に八人」考，名古屋大学，名古屋古代史研究会，名古屋古代史研究会例会，国内，2022年05月22日

川尻秋生，宣旨と綸旨（Imperial Edicts: Senji and Rinji），オンライン，国際東方学会会議，第66回国際東方学会会議，国際，2022年06月12日，招待有り

井上正望，古代・中世移行期における神器と天皇—劍璽を中心に—，同朋大学，日本宗教史懇話会，2022年度日本宗教史懇話会サマーセミナー，国内，2022年08月21日，招待有り

- 遠藤慶太, 火山と金峯山と, 奈良県立万葉文化館, 奈良県立万葉文化館, 第19回万葉古代学共公開シンポジウム「神と仏がやどる場所—山と水に寄せる古代信仰—」, 国内, 2022年08月27日
- 河合佐知子, Communicate Widely and Seek New Research Seeds: Jinbunchi Communicator Roles and Rekihaku Databases, University of Southern California, The Project for Premodern Japan Studies, 国際, 2022年09月08日, 招待有り
- 河合佐知子, Uncertain Powers, a Book Talk, University of Southern California, The Project for Premodern Japan Studies, 国際, 2022年09月09日, 招待有り
- 三上喜孝, 日本古代木簡の型式分類と機能的分類, 韓国・中央大学(オンライン), 韓国木簡学会, 韓国木簡学会第16回国際学術大会「韓・中・日古代木簡の名称に対する総合的検討」, 国際, 2022年09月23日
- 堀裕, 陸奥国分寺・国分尼寺と疫病・皇位継承—地域の歴史と遺跡を考える—, 聖和学園高等学校サールナートホール, 仙台市, 第12回全国国分寺サミットin仙台・陸奥国分寺, 国内, 2022年10月08日, 招待有り
- 早川万年, 壬申の乱とその時代, 大津市歴史博物館, 大津市歴史博物館, 壬申の乱1350年記念企画展「大友皇子と壬申の乱」記念講演会, 国内, 2022年10月10日, 招待有り
- 中村光一, 古代における東北経略と上野国, 群馬県立歴史博物館, 群馬県立歴史博物館, 群馬県立歴史博物館講演会, 国内, 2022年10月23日, 招待有り
- 川尻秋生, 地域史研究と龍角寺, 早稲田大学小野記念講堂, 早稲田大学津八一記念博物館, 下総龍角寺展関連シンポジウム「下総龍角寺再考—最新の発掘調査から—」, 国内, 2022年10月26日
- 遠藤慶太, 継体・安閑天皇と倭王権, 大神神社, 大神神社, 三輪山セミナー, 国内, 2022年10月29日
- 井上正望, 古代・中世移行期における平安京の「内」と「外」, 東京大学, 史学会, 第120回史学会大会, 国内, 2022年11月13日, 査読有り
- 小倉慈司, 市大樹「日本古代文書木簡の展開」へのコメント, オーシャンスイーツ済州ホテル, 慶北大学校人文学院HK+事業団, 慶北大学校人文学院HK+事業団第5回国際学術会議, 国際, 2023年01月30日, 招待有り
- 小倉慈司, 『延喜式』から見た堅魚製品, 東京医療保健大学世田谷キャンパス, 東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病(三舟隆之代表), シンポジウム カツオの考古学, 国内, 2023年02月24日
- 仁藤敦史, 古代都市の成立と展開—都城から国府・斎宮へ—, 市川市文化会館, 斎宮歴史博物館・市川市考古博物館, 伊勢斎宮と古代都市, 国内, 2023年02月25日, 招待有り
- 早川万年, 古代の天皇・皇子と西美濃, 養老町民会館, 養老町教育委員会, 西美濃古代皇族の歩み探訪事業シンポジウム, 国内, 2023年03月26日, 招待有り

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎小倉 慈司 本館研究部・教授 宗教史分野(神祇史), 研究の統括

【研究分担者】

遠藤 慶太	皇學館大学文学部・教授	文化史分野
新井 重行	東京大学史料編纂所・准教授	社会経済史分野
河合佐知子	本館研究部・特任助教	海外発信・海外研究者育成
川尻 秋生	早稲田大学文学学術院・教授	社会文化史分野
佐藤 真海	山形大学学術研究院・講師	宗教史分野(仏教史)
中村 光一	上武大学ビジネス情報学部・教授	政治史・技術史分野
仁藤 敦史	本館研究部・教授	法制史分野
堀 裕	東北大学文学部・教授	宗教史分野(仏教史)
三上 喜孝	本館研究部・教授	流通経済史分野
山口 えり	広島市立大学国際学部・准教授	宗教史・文化史分野

【支援研究員】

井上 正望

- (18) 基盤研究 (B)
幕末外交と贈答美術品—遣米・遣欧使節団の贈品を中心に
2021～2024年度
(研究代表者 日高 薫)
- (19) 基盤研究 (B)
超高齢多死社会を見据えた葬墓制システムの再構築：多様な生前と死後をつなぐために
2021～2024年度
(研究代表者 山田 慎也)

1. 目的

超高齢多死社会へ突入した現代日本において、高齢者（とくに家族のサポートが期待できない）がどのように死を迎え（葬儀を含め）死後の対処がなされているのか、行政や民間組織など第三者機関の役割に留意しつつ、アンケートやインタビューそして現地調査を行い、生前から死後への一貫した視点で、その実態を考察することを目的とする。この現在進行形の課題をより深く把握するために、過去・将来それぞれと向き合う課題にも取り組む。過去への課題は、個人化の進む現状へと至った要因を探り、無縁供養など将来への知見となりうる過去の多様性を把握するため、約200年程度の歴史的経緯を検討する。また将来への課題として、今後の状況へ対応するための葬墓制研究情報のプラットフォーム構築を目指し、学際的な葬墓制研究情報の整備に着手する。以上、現在・過去・将来それぞれに向き合う課題への取り組みを通して、人類史上経験のない超高齢多死社会をなつた日本が、安心して死を迎え／亡くなる人を送るための葬墓制システムの構築と文化の形成に寄与することを目指す。

2. 今年度の研究計画

全体会では、実施しているプロジェクトの進捗確認とコロナ禍における調査方法の検討、計画の確定、情報共有などを基盤とした打ち合わせおよび関連の研究会を行う。

課題1. いわゆる無縁死者に関する全国アンケートの準備および調査に着手する。これは全国1741の市区町村を基本としつつも、重点的な調査対象を定める。また、納骨のあり方、慰霊祭の有無、日常の祭祀など、調査項目の詳細について検討を行ない、関連する調査のデータも収集する。

課題2. 生前からの対応機関による死後への対処の実態調査は、終活や看取りを行う第三者機関が、死後の対応についてどのように取り組んでいるか、行政、高齢者施設、終活支援NPO法人（生前契約・死後委任事務）の調査対象の選択と依頼、さらに看取り、葬送、お別れ会、合葬墓等の対応などの調査項目の整理を行いつつ、感染状況を見据えながら調査を行う。

課題3. 死後の対応をおもに行う機関による生前からの対処の実態調査は、葬儀など死後の対応を主たる業務とする機関が、生前からの対応を検討するため、葬儀産業の中で業界を二分する葬儀專業業者と冠婚葬祭互助会、および寺院を対象として、調査への依頼と調査項目の検討の上で、感染状況を見据えつつ調査を行う。

課題4. 死者祭祀の歴史的変遷と無縁供養の多様性調査では、家（家族）が死者祭祀を担う葬墓制システムの成立・展開と、そこからはずれた無縁死者供養の多様性を解明するために、文献及びフィールド調査を行う。

課題5. 学際的な葬墓制研究情報のプラットフォーム構築では、進行中である特許庁編（1958）『特許分類別総目録 明治18年8月—昭和31年12月』を素材としたデータ作成の基礎的な情報項目の整理と検討を継続するとともに、『日本民俗調査報告書集成』からの摘録を開始する。産業化の一側面を示す特許情報と、伝統的のみなされた習俗情報と、双方の視点からプラットフォーム構築を行う。

3. 今年度の研究経過及び成果

プロジェクト2年目として、各メンバーの課題の共有と各自分担をした調査の情報共有を行った。また調査の途中における特徴的な課題についても検討を行った。とくにメンバーは葬送儀礼や墓制など死後の課題を中心に取り組んできたメンバーが多いため、生前の看取りに関しては、ゲストスピーカーを招聘して、現代の多様な看取りとその場についての報告を受けて、議論を行い生前から死後への一体的な理解の必要性を認識した。無縁死者に関しては引き続き行政ごとに担当カ所やその対応方式、生活保護法の適用の有無、火葬場の対応やいいコツの保管方法など多様な形態があり、その形式については検討を継続している。

また、墓祭祀や仏壇祭祀などの歴史的経緯については、引き続き検討を行っているが、墓制に関しては関東大震

災後の東京の復興と関連して、特殊墓地と言われるカロート式の家族墓の普及が要因となっているなど、多様な検討を行っている。また仏壇祭祀については、位牌の存在が大きいですが、位牌の形態については関東と関西での形式の違いが少なくとも高度経済成長期まで継続していたが、次第に流通の全国化によって大きく変化していることが判明した。また仏壇や位牌、墓の産業化とそれにとまなう工業所有権の展開も見られることが、特許情報の調査によって判明した。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

- ◎山田 慎也 本館研究部・教授
 土居 浩 ものつくり大学工芸技能学部・教授
 朽木 量 千葉商科大学政策情報学部・教授
 田中 大介 自治医科大学医学部・教授
 谷川 章雄 早稲田大学人間科学学術院・教授
 玉川 貴子 名古屋学院大学現代社会学部・准教授
 問芝 志保 東北大学大学院文学研究科・准教授
 瓜生 大輔 東京大学・先端科学技術研究センター・特任講師
 金 セツピョル 総合地球環境学研究所・研究基盤国際センター・特任助教
 森 謙二 茨城キリスト教大学・名誉教授
 鈴木 岩弓 東北大学・総長特命教授
 小谷みどり 身延山大学・客員教授

(20) 基盤研究 (C) 古代荘園と在地社会についての高度情報化研究 2020～2022年度 (研究代表者 仁藤 敦史)

1. 目的

本研究は、古代荘園と在地社会の実態分析から「日本型律令制」の理念と実態を、従来の肉眼観察だけによらないGISなどの新たな資料分析手法を積極的に導入することにより明らかにする。具体的には、初期荘園が「公地公民」を理念とする律令国家の変容から生まれたという通説の修正と、東大寺領北陸型荘園に片寄った資料的限界の打破を目指す。荘園立券化以前の土地利用状況を出土文字史料などにより明らかにする点も新しい試みである。

本研究の射程は、在地社会から古代荘園を見直し、律令制以前からの屯倉に代表される大土地所有と古代荘園との連続性を明らかにし、延いては「公地公民」を理念とする「日本型律令国家像」の相対化を試みる。条里坪付けごとの情報やその古代景観を明らかにでき、その景観が開発により急速に失われつつある「額田寺伽藍並条里図」や柴山寺文書を中心に分析する。

2. 今年度の研究計画

最終年度は、A額田寺伽藍並条里図の非破壊分析（印影と布端を中心に）と麻布の科学的分析、および分離した糸片による炭素14年代測定法による絵図の成立年代の推定、B条里坪付情報の高度情報化作業を進展させることを計画している。加えて、C基本図書の資料収集、D荘園史料の整理検討も並行しておこなうことを予定した。フィールドワークとしてはE柴山寺周辺調査（奈良県五條市）と額安寺周辺調査（奈良県大和郡山市）などを予定した。

3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は、新型コロナ蔓延による移動の制約が緩和された時期に、8月1日～3日と12月25～26日の二回にわたり河南三条を中心とするフィールドワークを実施することができた。額田寺絵図に記載された水路が初瀬川なのか中間の水路であるかを検討するため、現地の用水を確認したところ、現在も中間地帯に用水が暗渠となって存続している事を確認した。また河南三条については、用水の経路やため池の位置などを確認し、現在のあぜ道が条里の区画として機能していた可能性を確認した。

前年までの研究史整理で明らかとなった、柴山寺文書から導かれた平安期の土地管理システムの論点を再検討し、「方荒（かたあらし）」などは四年サイクルで提出された文書からは休耕田の存在を明確には論証できないことなどが問題となった。このように現在の研究水準によれば必ずしも証明できない論点がいくつか存在することを明らか

とした。その成果の一部は、歴博共同研究の研究会において発表をおこなった。

Bの額田寺伽藍並条里図の非破壊分析と麻布の科学的分析については、糸の織りに詳しい佐賀大の石井美恵氏を研究協力者として呼び寄せて8月19日に本館島津美子氏らの協力を得て、電子顕微鏡による非破壊調査を実施した。条里図から分離し、台紙の紙に付着した四片の糸をサンプルとして炭素14年代測定法により測定したところ八世紀第三四半世紀までにすべて収まることが確認された。サンプルの示す年代はいずれも同じ数値を示すことから、結論には高い蓋然性が存在すると考えられる。絵図の成立年代については、天平宝字から天平神護という四字年号の時代あるいは宝亀年間という説が存在したが、前者である可能性が高くなったと考えられる。前年から引き続き印影および糸の顕微鏡観察によれば、特に左端については、明確に端辺を超えて国印が捺されていることや、布の切断面の検討を加味するならば、本来はさらに大きな図面、あるいは文書的な形式であった可能性も指摘できた。具体的な押印個所の正確な位置については見取り図を今後、公開したい。Cの条里坪付け情報については、坪単位の開発情報の集積を完了し、地理情報ソフトにデータを集成した。寺周辺の寺領が北方に拡大していく過程が確認され、根拠となる官符はある時期に偽造された可能性が高くなった。条里図に記載された氏族の先祖の墓を表記することで寺北方の丘陵部の占有を認めさせるあり方は、栄山寺領において藤原武智麻呂の墓域内（東西十五町・南北十五町）が、その後の栄山寺領において重要な経営拠点となっていたことと共通し、古代荘園領有の法的根拠を確認することができた。

歴博共同研究と合同のフィールドワークおよびZOOM会議において、古代・中世研究者から多くの助言を受けた。研究成果については、歴博研究報告に論考の掲載を予定し、地理情報ソフトに集成した内容はデータベースとして公開したい。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎仁藤 敦史 本館研究部・教授

【研究協力者】

石井 美恵 佐賀大芸術地域デザイン学部・准教授
 島津 美子 歴博情報資料研究系・准教授
 服部 一隆 明治大学兼任講師
 中島 皓輝 明治大学博士後期課程
 公家 怜亮 慶応大学博士修士課程

(21) 基盤研究（C）

日本開国史の再構築—「開国のかたち」をめぐる国際的相剋の解明
 2020～2022年度
 （研究代表者 福岡 万里子）

(22) 基盤研究（C）

実証的地名研究と地名の歴史資料化—カリヤドとは何か—
 2020～2023年度
 （研究代表者 青山 宏夫）

1. 目的

本研究の目的は、実証的な地名研究の提示と確かな歴史資料の獲得である。そのために、全国的に分布するカリヤドという地名について、それが指し示す空間の自然的特徴・社会的機能・歴史的経緯に注目して、全国25箇所の事例を中心に一つ一つ検討する。具体的には、それぞれがいかなる地形条件にあり、いかなる交通路上の位置を占め、いかなる諸施設が立地していたか、そこが当該地域においていかなる機能を果たしてきたかなどについて、歴史地理学的方法はもとより、文献資料や考古資料、現地に残る伝承・伝説などを活用して明らかにする。次いで、個々の事例を相互に比較し、それらに共通する特徴を抽出する。これによって、これまでに指摘した、①河川に向かって舌状に突き出た台地や微高地に位置する場合が少なくないこと、②交通路とくに古代や中世の幹線道路が通過していること、③渡河点にあたっていることの3点について、全国的な事例から検証する。

2. 今年度の研究計画

新型コロナウイルス感染症の感染状況が今後も予断を許さないことを考慮して、前年度に引き続き、文献調査とオンライン等での情報収集を中心に進める。とくに、地名辞典等の小字一覧の網羅的な調査は有意義であることから、今後、東北地方および北陸、関東の一部について実施して東日本の調査を完了させるとともに、比較検討するために西日本の一部についても調査を進める計画である。あわせて、地形図、空中写真、各種文献・史資料等、オンラインで利用可能なものを積極的に活用して、「カリヤド」という地名の立地条件の検討を進める。また、現地調査についても、新型コロナウイルス感染症の感染状況に注意を払いつつ可能な限り実施する。

3. 今年度の研究経過及び成果

地名辞典に掲載された小字一覧の網羅的な調査では、新資料が発見されるなど、これまでに大きな成果をあげることができたが、今年度は茨城県、福島県、宮城県、岩手県の4県について実施した。具体的には、『角川日本地名大辞典』に掲載された小字一覧から関係地名を抽出した。対象とした総頁数は361頁であり、1頁あたり約900件の小字が掲載されているので、概算で約32万件の小字を精査したことになる。

その結果、漢字表記では「仮宿」「狩宿」「借宿」「菟宿」と様々であるが、「カリヤド」と読む地名を福島県で7箇所、茨城県で4箇所、岩手県で2箇所、宮城県で1箇所の、合計14箇所を抽出することができた。このうち1箇所（茨城県）は新出資料である。限られた文献調査とはいえ、北関東から東北の4県にわたる広域において、約32万件の地名を検討することから得られた結果は、一定の信頼性を有するものと評価できる。

また、現地調査については、カリヤド地名分布域の西端にある三重県東員町およびその周辺において実施した。その目的は、これまでの2本の拙論（「地名『カリヤド』と渡河の景観—関東の事例から—」〔金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館、2018〕、「東北地方のカリヤドという地名—中世の道と渡河—」〔史林102-5.2019〕）で報告した関東・東北の諸事例、一昨年度の静岡県御前崎市の新出事例、昨年度の千葉県市原市の新出事例など、東日本の事例での検討結果と比較するためである。

東員町の仮宿は、員弁川左支流の戸上川（茶屋川）左岸の更新世段丘端に位置する。そこは、台地が川に向かってやや張り出した地点であり、対岸の更新世段丘と向き合って、戸上川河川敷の狭隘部を形成する。これまでの事例で指摘した、河川に向かって突き出た台地や微高地に位置するという「カリヤド」の地形的特徴を、この東員仮宿も有していることがわかった。また、東員仮宿は、美濃・近江・桑名へ至る幹線道路の濃州道に沿い、戸上川の渡河点にもあたる（現在は茶屋橋が架かる）。これらの点を踏まえると、東員仮宿は地形的にみても交通路の点からみても、これまでの研究で指摘してきた「カリヤド」の特徴と一致することが明らかになった。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎青山 宏夫

(23) 基盤研究 (C) 19世紀の日本における絵具素材の移り変わり 2021～2023年度 (研究代表者 島津 美子)

1. 目的

本研究では、絵画、錦絵、写真といったさまざまなジャンルの彩色資料を対象に、とくに19世紀の絵具はどのような素材で作られ、流通していたのかを明らかにすることを目的とする。

日本絵画などの絵具分析は1950年代から行われているが、絵画以外の彩色資料の分析、とりわけ染料から作られた顔料分析まで行っている事例は限られている。他方で、江戸時代中期（18世紀後半）に誕生した多色摺木版画では、主に染料を粉末に加工したものを絵具に用いていた。こうした有機質の顔料の素材や製造法については明らかにされていないことも多いことから、当該時期に製作された彩色資料を対象に、資料の属性を問わず横断的な絵具の材質分析を行うことで、江戸時代から明治期にかけての絵具の素材とその加工方法、流通について明らかにすることを目的とする。

2. 今年度の研究計画

初年度調査を行った「Illustrations of Japanese Life」は、初版刊行年の1896年以降、10版以上を重ねており、その3版が所属先に所蔵されていることがわかっている。この資料に加え、同時期に製作された館蔵の類似資料を探し、これらの実資料の分析調査を進める。あわせて、同時代の手彩色写真などを詳細な材質分析のため別途入手し、

染料から作られた絵具の分析を実施する。コロタイプ印刷の彩色材料についても、実資料の調査を追加で行い、材料の同定を目指す。

手彩色写真やコロタイプ印刷などの文献調査も進め、明治期の文献と実際に使われた絵具との整合性について検討を行う。昨年度の実資料調査の遅れを取り戻し、明治期の彩色写真に用いられた絵具の全体像を明らかにすることを旨とするともに、19世紀の絵具素材を概観できるようにする。

3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は、昨年度実施した神田佐野文庫（神田外語大学）が所蔵する「JAPAN: Described and Illustrated by the Japanese, Edition De Luxe」全十巻（フランシス・プリンクラー編著）（1897年発行）などについて、追加の調査を実施した。また、分析事例を増やすため、同時期の手彩色写真や多色摺の版本などを新たに調査対象とした。昨年度に引き続き、とくに明治中頃の絵具素材に着目し、有機質の顔料の同定を試みた。

手彩色写真に用いられた絵具の色は、赤、青、緑、黄、紫の5色がほとんどで、青や緑は空、海、植物など風景や背景の着彩に用いられ、赤、黄、紫は着物や家財道具などに用いられる傾向が認められる。光学顕微鏡による観察から、赤とピンクの箇所は共通の色料が用いられていることが推測された。分析の結果、有機化合物としてはエオシンが検出された。色調の濃い部分では、近世期にも使用している無機顔料の水銀朱と混ぜて使用する事例が多く、また、黄色みのある赤から橙色には鉛丹が使用されていた。紫については、単独の紫色料が用いられており、メチルヴァイオレットを用いた事例を確認した。

他方、明治中頃までの錦絵においては、赤に輸入のカーマイン（洋紅：カイガラムシから抽出した赤色色素を主成分とする）が単独、あるいは水銀朱やベンガラなどの赤色顔料と混合して用いられるようになることがわかっている。合成材料であるエオシンもカーマインよりは遅いようであるが、錦絵の赤に用いられていた。その後、明治中頃以降には合成染料の第2世代といわれるアゾ系の色料が使われるようになったものと考えられる。錦絵の紫には、先行研究により江戸末期頃からプルシアンブルーと赤あるいは合成の紫色料を混合した絵具が用いられたことが示されていた。今回、明治期の錦絵において、実際に合成有機化合物であるフクシンとメチルヴァイオレットが紫色箇所に用いられていることが明らかとなった。

手彩色写真と錦絵の双方において合成材料の使用に一定の共通性がありそうな結果が得られた。一方で、絵画や近世期の錦絵から引き継がれて無機顔料が使われていることもうかがえる。写真という新たなメディアではあるが、着彩の技法・材料は近世期から続く従来の手法が基本にあるように考えられる。一度にすべての絵具を新しいものに入れ替えるのではなく、供給される素材にあわせて部分的に絵具の成分組成を変化させていったものと推察される。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎島津 美子 本館研究部・准教授

(24) 基盤研究 (C)

3D計測による縄文・弥生・古墳時代の土器装飾を貫流する「文様破調」
の実態解明

2021～2023年度

(研究代表者 石井 匠)

1. 目的

近年の縄文土器や弥生土器をフォーカスする博物館・美術館の展覧会は、両者の違いを際立たせる対置展示と各時代固有の美を称揚する展示に分かれる。どちらも、展覧会企画者の考古学者達の念頭には各時代間の美の断絶が想定されており、その背後には「狩猟採集民社会→農耕民社会→王権社会」という発展段階説に裏打ちされた「過去<現在」という価値尺度のバイアスと、これと相即不離の「未開<文明」「周縁<中央」という根強い差別意識が見え隠れする。問題は、本来、各時代の美を構成する要素の共通性と差異を解明する美術考古学的な問いに立脚するはずの議論が、政治的な価値比重の議論にすり替えられ、違いばかりが注視されることにある。

本研究では、各時代の土器面全域の装飾文様に焦点を当て、これまで看過されてきた縄文・弥生・古墳時代の美に貫流する共通の要素と目される「文様破調」（土器面を帯状に周回する連続文様の反復リズムを意図的に一か所で崩すもの）に注目し、3Dモデルを用いて土器面全域の文様構造を多視点から分析することで、その実態を明らかにし、あらたな先史美術史像の構築を試みることを目的としている。

2. 今年度の研究計画

初年度は当初計画調査が実施できず、2年目は、初年度に実施できなかった3D写真計測調査の機会をうかがいつつ、初年度に集積した発掘調査報告書ベースの2Dデータの新事例を基に学会発表や論文投稿、招聘講演等で、順次可能な成果の公開に努めていくこととした。しかし、2年目も新型コロナウイルス感染拡大の煽りをうけるとともに研究代表者の重症化リスクの問題もあり、初年度計画調査の実施を見合わせる他なく限定的な調査にとどまったが、当初計画から収集データの対象を切り替えた2年目の上記変更計画は概ね達成できた。新型コロナウイルス感染拡大による活動制限等により当初の計画は大幅に遅れているものの、新型コロナウイルスによる活動制限が緩和された最終年度は可能な限り調査を実施し、研究成果の公表に勤めたい。

3. 今年度の研究経過及び成果

新型コロナウイルス感染拡大による活動制限等により、3D計測調査から発掘調査報告書の渉猟に切り替えた初年度の成果を、民族藝術学会口頭発表「縄文・弥生・古墳時代における土器の『文様破調』について」や福井洞窟ミュージアムどうくつ体験リレー講座「縄文と芸術」（招聘）、小田原田原市遺跡講演会「弥生・縄文時代の人々の心に近づく方法」（招聘）など各地の口頭発表や講演、講演資料等にて紹介した。また、朝日カルチャーセンター名古屋教室の講座「岡本太郎と縄文人の『芸術』」では芸術家・岡本太郎の縄文時代に対する基本的な考え方を紹介し、『現代思想』への寄稿「遠野と『縄文』／『遠野物語』」や『モノ・構造・社会の考古学：今福利恵博士追悼論文集』への寄稿「相互浸潤する土器と土偶のハイブリッド」、ハワイ大学における国際会議での共同発表「Mutual permeation model of things, people, and the supernatural: Insights from Jomon pottery and dogu figurines」では、本研究から派生する議論として、岡本太郎の縄文時代に対する観点を批判的に継承した研究代表者の「物・人・超自然の相互浸潤モデル」から、近代の東北における狩猟と縄文時代の関係性や、縄文土器と土偶の相互浸潤の問題について新たな仮説を提唱するなどした。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎石井 匠 国立歴史民俗博物館・科研費支援研究員

【研究協力者】

深澤 太郎 國學院大學博物館・准教授

(25) 基盤研究（C）

日中戦争・太平洋戦争期華南における中国占領地支配の進展と国際環境の変容

2021～2024年度

（研究代表者 吉井 文美）

(26) 基盤研究（C）

地域民具コレクションの整理手順のモデル化と緩やかな保存についての実践的研究

2021～2023年度

（研究代表者 川邊 咲子）

(27) 若手研究

データ駆動型歴史研究のための共用テキストレポジトリ構築

2020～2022年度

（研究代表者 橋本 雄太）

1. 目的

本研究の目的は、日本語歴史資料テキストの共用レポジトリ（歴史資料版「青空文庫」）の構築を通じて、歴史資料を対象としたデータ駆動型研究の基盤を確立することである。テキストマイニングやデータ可視化など、機械処理を駆使した歴史研究の遂行には機械可読形式で提供される大量のテキストデータの存在が不可欠である。しか

しわが国は歴史資料のデジタルテキスト化について諸外国に大きな遅れを取っている。本研究では、まず①日本語文献資料に特化した軽量マークアップ言語の開発を通じてテキストの構造化記述を支援し、②また人文学資料の国際標準機械可読フォーマットであるTEIとの互換性を確立することで、その学術資源としての利用可能性を担保する。③さらに歴史資料翻刻テキストのユーザー参加型レポジトリを開設し、第一段階としてクラウドソーシングによって得られた650万文字の翻刻テキストを公開する。これによって国内外の研究者が日本語の歴史文献を対象としたデータ駆動型研究に取り組むための環境を整備する。

2. 今年度の研究計画

資料テキストの構造化年目にあたる本年度は、資料テキストのスタンドオフマークアップシステムの公開をおこなう。

3. 今年度の研究経過及び成果

本研究の目的は、日本語歴史資料テキストの共用レポジトリ（歴史資料版「青空文庫」）の構築を通じて、歴史資料を対象としたデータ駆動型研究の基盤を確立することであった。研究計画策定時から生じた大きな変化のひとつは、2021年末に国立国会図書館の全文OCR事業を通じて、前近代の古典籍を含む莫大な点数のPD資料の全文テキストが利用可能になったことである。このため、複数データソースを集約するテキストレポジトリを構築することよりも、資料のOCRテキストを構造化し、日時情報や位置情報といった重要情報の機械的な抽出を可能にする手法の研究がより重要になった。そこで、研究の重点をテキスト構造化の研究に変更し、多数の資料のテキストを効率的に構造化する手法の研究に集中的に取り組んだ。具体的には、クラウドソーシングにより歴史資料のテキストアノテーションとエンティティリンクングをおこなうためのWebアプリケーション「みんなで注釈」(<https://ansei2.vercel.app/stages/1>)を構築した。またアルバイトに依頼し、実際の資料の構造化を通じてシステムを試用してもらった。その成果として、テキストアノテーションのマニュアルを制作し、また安政江戸地震に関する10点の資料の構造化が完了した。この作業を通じて可視化された資料内容は、たとえば次のページで閲覧することができる：<https://ansei2.vercel.app/entry/L000153/map>「みんなで注釈」は2023年夏を目処に一般公開する予定である。本研究に関しては、2023年1月に開催された情報処理学会人文科学とコンピューター研究会で報告した。また、2022年12月にケンブリッジ大学にてデジタル人文学についての国際シンポジウムを開催し、テキスト構造化の問題について議論をおこなった。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎橋本 雄太 本館研究部・准教授

(28) 若手研究

戦後の炭鉱における労働・労働災害史に関する基礎的研究

2020～2023年度

(研究代表者 佐川 享平)

1. 目的

本研究は、戦後の日本炭鉱史を労働と労働災害の視座から検討することを目的とする。より具体的には、ともに個人所蔵の未整理資料である「三菱高島礦業所端島炭坑関係資料」（仮称、以下、「端島資料」と略す）と「原田正純旧蔵三井三池炭鉱炭じん爆発事故患者関係資料」（仮称、以下、「三池資料」と略す）を調査・整理・活用することにより、戦後の炭鉱における労働災害と、労働災害をもたらす炭鉱労働のあり方・環境を多面的に分析・解明することを目指すものである。

2. 今年度の研究計画

上記の目的のため、本研究では、(1)「端島資料」と「三池資料」の保全・整理・目録作成、(2)両資料の来歴・性格および関連資料の調査・把握、(3)両資料ならびに関連資料の分析を通じて労働と労働災害の視座から戦後日本炭鉱史を再構成する、という3つの課題を設定し、課題(1)・(2)を〈基幹的研究〉に、課題(3)を〈展覧的研究〉に位置付けている。本年度は、引き続き〈基幹的研究〉に注力し、課題(1)・(2)を継続した。

3. 今年度の研究経過及び成果

課題（1）では、昨年度末、所蔵者より一括して引き取った「端島資料」について、引き続き殺虫・カビ拡大防止等の保全措置を講じつつ、整理作業を継続した。整理作業では、特に、質的・量的にも豊富で、系統的に情報を収集・分析することが可能な「離職者名簿」に注目して、そのデータ化を重点的に進めた。これまでに、約1500名分のデータを採録している。また、「三池資料」については、継続して取り組んできた患者からの聞き取り記録の文字起こし作業を完了した。この作業を通じて、約80万字を文字起こしした。

課題（2）では、「端島資料」の一部が、福岡県直方市所蔵「筑豊文庫資料」のなかに紛れている可能性が確認され、「筑豊文庫資料」の調査を行った。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎佐川 享平

(29) 挑戦的研究（萌芽）

縄文土器文様を奏でる：考古学と音楽教育の協同による新感覚体験学習プログラムの創出

2020～2022年度

（研究代表者 中村 耕作）

1. 目的

本研究は、縄文時代・縄文土器に関する考古学の成果と、音楽教育における「音楽づくり（創作）」の方法をコラボレーションすることで、歴史博物館教育と音楽教育双方に有効な「縄文土器文様のパターンを音楽で表現する」という新たな体験プログラムを内容的・理論的に高度化し、一般化することを目的とする。具体的には①ワークショップを開催し、音楽づくり教育の専門家の助言を得て内容を高度化するほか、②異分野・機関のコラボレーション・連携の理論的基盤を整理する。本プログラムは既に2016年度から体験発掘、小中学校の音楽や総合学習の授業として試行しているが、音楽としての完成度など課題は多い。そこで、本研究では音楽教育の専門家や学校教員・博物館学芸員などの外部研究者と協力しながら内容の高度化を図る。本研究は、考古学×音楽教育、大学・博物館×小中学校という異分野のコラボレーションによって、考古学学習、音楽学習、異文化理解、大学教育の高度化、大学・博物館と学校との連携などの要素を含んだ新たな教育プログラムを生み出すという意義を有する。

2. 今年度の研究計画

縄文と音楽という異質な要素をかけあわせ、主体性と協働性を育みながら新たな価値を創造することを目標とし、博物館・公民館などの社会教育施設での実施や、小中学生以外の参加者での実践に取り組む。また、昨年度までの実践をまとめて報告する。

3. 今年度の研究経過及び成果

埼玉県春日部市郷土資料館、栃木市キョクトウとちぎ蔵の街楽習館（公民館）、埼玉県蓮田市中央公民館・文化財展示館においてワークショップを実施した。春日部は前年度に続く2回目、栃木市は会場を変えて2回目、蓮田市は前年度中学校で実施したことをうけて社会教育の場での実践を要請されたものである。毎回、音楽教育、文化財活用、博物館学、生涯学習等の専門家を招き、事後検討会を実施し、次回の実践で課題の克服を目指した。

具体的には、春日部では、音に加えて、新たに身体の動きで縄文を表現することを試みた。栃木市では、館のコーディネートにより公募ではなく2つの高校の部活動を招き、高校生ならではの分析力・表現力を発揮したワークショップを開催できた。蓮田市では、公民館が発案し、文化財展示館と共同で、展示館の縄文土器を利用し、隣接する国史跡黒浜貝塚を会場の一部として活用するという良好な場での実践となった。内容的にも、前期の土器と中期の土器の違いを音で表現し分けることを試み、一定の成果を得た。

2021年度までのワークショップの成果については、考古学研究会、全日本博物館学会、日本音楽教育学会で発表し、2021年度末に実施した中学生を対象とした実践の報告を執筆した。2022年度の成果については、2023年度の日本考古学協会総会にて発表を予定している。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎中村 耕作 本館研究部・准教授

早川富美子 國學院大學栃木短期大学・教授

【研究協力者】

實松 幸男 春日部市郷土資料館
 鬼塚 知典 春日部市郷土資料館
 鈴木 廣志 栃木市蔵の街楽習館
 永田 陽一 栃木市蔵の街楽習館
 横山りつ子 蓮田市中央公民館
 小林 美穂 蓮田市文化財展示館
 永岡和香子 浜松学院大学短期大学・教授
 近藤 真子 文教大学・准教授
 石井ゆきこ 東京都港区芝小学校
 中尾 智行 文化庁・博物館支援調査官
 橋口 豊 横浜市歴史博物館

(30) 挑戦的研究（萌芽）

沖縄/日本/アメリカ，女/男の分断を超えた視点の構築—作曲家・金井喜久子を中心に
 2021～2023年度
 （研究代表者 内田 順子）

1. 目的

沖縄県宮古島出身の金井喜久子（1906—1986）は、女性作曲家として日本で初めて本格的な交響曲を作曲した人物である。1930年代から1980年代までの約50年間、沖縄音楽をモチーフとして、西洋音楽の手法により多くのジャンルの作品を作曲したほか、琉球諸島の民謡やわらべ歌の研究など、幅広く活動した。これほどの事績を残した人物でありながら、先行研究は限定的で、正当に評価されていないのが現状である。本研究は、喜久子の活動に関する未整理・未発表の資料群を整理・可視化し、情報を分析することによって、喜久子の事績を実証的に明らかにする。さらに、その資料群に含まれる、美術・文学・批評・映画・社会運動等の第一線で活動した人々に関する情報を整理し、喜久子の人的ネットワークを分析する。以上により、沖縄近現代史や社会運動史、女性史、ジェンダー研究などのマクロな研究への接続を試みる。

2. 今年度の研究計画

2022年度は、COVID-19の感染防止の観点から2021年度に実施できなかった金井喜久子関係の楽譜・写真・文書（チラシ・プログラム）等の資料整理を継続して実施する。さらに①金井喜久子の活動の社会的反響についての情報収集、②人的ネットワークの分析を進める。

3. 今年度の研究経過及び成果

金井喜久子のご遺族の私邸に保管される資料の調査であり、ご遺族の立ち会いと協力のもとで調査を進める必要があり、2022年度もCOVID-19の感染防止の観点から、調査を実施することをひかえたことにより、資料整理に遅れが生じた。2022年度は、金井喜久子が残した演奏会チラシ・プログラム等の文書類、音響資料について、2021年度に引き続き資料整理を実施した。ご遺族が保存管理するこれらの資料について、2022年5月14日、5月28日、6月11日、6月25日、7月9日、7月23日、8月6日、9月17日の計8回、調査を実施した。2年度にわたる資料整理により、①演奏会のプログラム、チラシ、ポスター、沖縄復帰式典関係書類、『琉球の民謡』（1954年、音楽之友社）等の草稿、新聞スクラップ、書簡など337点、②交響曲第1番を録音したレコード等55点、③オープンリールテープ・カセットテープ102点が確認でき、残されている資料の全体像を把握することができた。これらの資料と、楽譜の草稿等1728点を、ご遺族のご意向に従って歴博に研究借用し、資料整理と調査を継続した。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎内田 順子 本館研究部・教授

(31) 特別研究員奨励費
地球化学分析が可能にする津波浸水域の高精度復元
2020～2022年度
(研究代表者 篠崎 鉄哉)

1. 目的

本研究は、西暦869年貞観津波の浸水範囲を化学的手法により復元し、日本海溝において発生した過去最大規模とされる貞観津波の規模を再評価することを目的とする。先史時代に発生した津波の浸水は、津波の地質学的な証拠である津波堆積物の分布によって推定されることが多かった。しかしながら、津波による海水の浸水範囲は、肉眼で確認可能な砂質の津波堆積物の分布と大きく違うことが指摘されている。そこで本研究では、化学分析によって当時の海水の痕跡を地層中から見つけ出すことで、津波の浸水範囲をより正確に復元することを試みる。まず、2011年の津波堆積物を対象として、津波浸水による化学的特徴を明らかにし、海水の痕跡を示す化学的指標を決定する。その上で、869年貞観津波を対象として、視認困難な海水の痕跡を化学的手法より見つけ出す。海水の痕跡の分布から貞観津波の浸水域を正確に復元し、津波規模の再評価を行う。

2. 今年度の研究計画

研究課題の最終年度である今年度は、海水痕跡の検出による869年貞観津波の浸水域の推定を行う。869年貞観津波の堆積物の分布限界よりも内陸で採取した柱状試料に対して、高解像度（厚さ0.5 cm）で分析を行い、肉眼では観察困難な津波浸水の痕跡を化学分析により明らかにする。複数地点の堆積物を分析し、化学的特徴が検出する地点、検出しない地点を精査し、貞観津波の浸水域の推定を行う。

3. 今年度の研究経過及び成果

本研究課題の最終目標である、869年貞観津波の浸水域の高精度復元を試みた。試料は宮城県亶理郡亶理町で複数本採取した。先行研究との対比から、比較的海岸に近い地点では、915年十和田aテフラや貞観津波、1611年慶長津波、1454年享徳津波による堆積物の可能性があるイベント層が確認できた。一方、内陸地点で得られた堆積物中には十和田aテフラの可能性のある層は観察できたものの、津波堆積物と考えられる層準は確認できず、本研究で目的としている津波堆積物の堆積限界より内陸での試料採取に成功した。まずは比較的海岸に近い地点で採取した試料に対して、869年貞観津波と考えられる砂層とその上位下位の土壌層のバイオマーカー分析を行った。その結果、砂層の上位と下位で環境変化を捉えることができた。この環境変化を内陸地点の貞観津波堆積物が視認できないところでも検出することができれば、津波流入の痕跡を示すことが出来る可能性がある。今後は分析・解析を続け、この環境変化の痕跡や特徴的なバイオマーカーを追うことで、この地域における津波浸水範囲の高精度化を目指す。

4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎篠崎 鉄哉

(32) 受託研究
冠婚葬祭総合研究所「冠婚葬祭と情報化に関する研究」
(研究代表者 山田 慎也)

(33) 受託研究
出土文字資料の集成的研究
(研究代表者 三上 喜孝)

1. 目的

岩手県では「平泉文化研究機関整備推進事業」に基づき、第1期研究計画（H12～21年度）及び第2期研究計画（H22～R元年度）を通して継続的に研究を推進し、多くの成果を蓄積するとともに、毎年度、「平泉文化フォーラム」及び「平泉文化研究年報」により成果を公開してきた。2020年度開始の第3期からは、5カ年計画で5つのテーマを設定し、大学や国立の研究機関と連携をはかりながら研究を進めていくことになった。本研究課題は、その一つとして、12世紀平泉の政治、文化、宗教の諸相を明らかにするため、柳之御所遺跡を中心とした平泉の出土文字

資料の整理・読解・内容検討を行い、同時に12世紀の国内出土事例を収集し、平泉の政治・文化・宗教の諸相を復元することを目的とする。

2. 今年度の研究計画

- ・柳之御所遺跡の出土文字資料の整理、読解、内容の検討を行う。
- ・12世紀の国内出土事例を収集し、平泉の政治、文化、宗教の諸相を復元する。
- ・先端的科学機器を用いて文字資料の解読等を行う。
- ・平泉に設置される「新ガイダンス施設」を活用した調査、研究活動（平泉において10日から2週間程度の滞在研究を含む）を行う。
- ・研究成果を「平泉学研究会」と「平泉学フォーラム」及び「平泉学年報」で成果を発表し情報を発信する。

3. 今年度の研究経過

新型コロナウイルスの感染拡大の影響を含む諸般の事情により、今年度の現地調査・資料調査は行わず、昨年度の調査や発掘調査報告書のデータ等をもとに研究を行った。

4. 今年度の研究成果

今年度の研究成果を、2023年2月4日の「平泉学研究会」（於岩手大学、現地参加）において研究者向けに、2月5日の「平泉学フォーラム」（於メトロポリタンホテル盛岡、現地参加）において一般向けに口頭発表し、それを三上喜孝「平泉出土文字資料へのアプローチ（3）折敷再利用木簡」『平泉学研究年報』3,2023年3月としてまとめた。

5. 研究組織（◎は研究代表者）

◎三上 喜孝 本館研究部・教授

(34) 受託研究

冠婚葬祭総合研究所「冠婚葬祭と情報化に関する研究」

（研究代表者 橋本 雄太）

1. 目的

冠婚葬祭の多様な歴史的展開を情報化の観点から明らかにし、儀礼を行う人々にどのような影響を与えてきたのか検討し、人々の人生観や生命観を照射することを目的とする。

2. 今年度の研究計画

デジタル技術を駆使してビジネスプロセスや生活形態を変革することを指す「DX (Digital Transformation)」という言葉が普及して久しい。DXはプライダル業界においても進みつつあり、結婚式のあり方に少なからず影響を及ぼしている。特にコロナ禍を通じてプライダル業界におけるDXは急速に進行しつつあり、挙式や披露宴をインターネット配信する「オンライン結婚式」まで登場するようになった。今年度はこうしたDX推進を通じて登場しつつある新しい結婚式のあり方について、統計資料と具体的事例から現状と今後の趨勢についてまとめる。

3. 今年度の研究経過

結婚式におけるIT活用の現状と趨勢について調査レポートを執筆した。

4. 今年度の研究成果

冠婚葬祭研究所よりオンライン論文として刊行予定。

5. 研究組織（◎は研究代表者）

◎橋本 雄太 本館研究部・准教授

土居 浩 ものつくり大学・教授 田中 大介 自治医科大学・教授

小谷みどり シニアライフ研究所・代表 玉川 貴子 名古屋学院大学・准教授 瓜生 大輔 東京大学・助教

問芝 志保 日本学術振興会・特別研究員 宮澤 安紀 國學院大學・研究員

大場 あや 大正大学・非常勤講師
山田 慎也 国立歴史民俗博物館・教授

(35) 産学連携共同研究
日本産樹木年輪による炭素14年代較正曲線の構築に関する研究
2022～2024年度
(研究代表者 坂本 稔)

1. 目的

地質環境の長期安定性に関する研究では、断層運動や火成活動などの自然現象を対象とする。その発生時期等を明らかにするために年代測定が行われるが、数万年を対象とした年代測定において、最も高精度な年代法のひとつである炭素14年代法が最も良く利用されている。

炭素14年代法では、得られた炭素14年代を暦年代に変換するため、年輪年代法で年代の判明した樹木年輪などのデータに基づく「較正曲線」を用いる。較正曲線は世界共通のものであるため、その作成には世界中のデータが使用される。これまでわが国のデータで取り入れられたものは、福井県水月湖の堆積物のみであったが、2020年に発表された最新の較正曲線(IntCal20)には、初めて国産樹木年輪のデータが採用された。しかし、柱材など産地の不明な樹木のデータが多く、数も少なく、高精度の較正曲線を構築するにはデータが不足している。

本研究では、次期較正曲線作成時へのデータ提供を目指し、令和2～3年度に行った共同研究で得られたデータ及び知見に加え、さらに日本産樹木年輪のデータを拡充し、炭素14年代較正曲線の構築を進める。測定試料として、国内で採取された現地性の樹木を対象とする。数百年以上の樹齢を持ち、生育地の明らかな樹木の年輪年代と炭素14年代を得ることにより、次期較正曲線の重要な基礎データとなることが期待できる。

国立歴史民俗博物館(以下、歴博)は、日本産樹木年輪の炭素14年代の収集を行っており、最新の較正曲線(IntCal20)作成において日本産樹木年輪のデータを提供し、採用された実績を有す。日本原子力研究開発機構(以下、原子力機構)は、東濃地科学センターの加速器質量分析装置(以下、AMS)を用いて、炭素14による地質試料の年代測定を実施しており、上記日本産樹木年輪データの測定も一部担当した。

このようにそれぞれの専門性、施設を生かし、双方が所有する専門的な知識及び技術を融合して本共同研究に取り組むことにより、国内データの取得を効果的かつ効率的に進めることができ、次期年代較正曲線作成時に多くの国内データを提供できる。これにより、歴博で行う考古学資料の年代推定や原子力機構で行う地質環境の長期安定性研究における地質試料の年代推定など、国内試料の年代推定の精度向上が期待できる。

2. 研究組織(◎は研究代表者)

◎坂本 稔 本館研究部・教授
箱崎 真隆 本館研究部・准教授
國分 陽子 原子力機構東濃地科学センター・研究主幹
藤田奈津子 原子力機構東濃地科学センター・研究員

(36) 産学連携共同研究
展示資料を使った教材開発研究
2021～2023年度
(研究代表者 村木 二郎)

1. 目的

展示資料は歴史学習の教材として極めて有用性が高い。これまでも国立歴史民俗博物館(以下、歴博)では、小中学生を中心対象として、展示室の実物資料や複製資料、復元模型を観察することで歴史を学ぶプログラムを多数考案してきている。しかし、校外学習の時間が減少する中、学校遠足ではプログラムを十分消化できないことが多い。それ以上に、大多数の学校は歴博に出向くこともできず、これらを楽しむことが不可能であり、その認知度も低い。COVID-19の蔓延によりこうした傾向はますます拡大する一方であり、展示室で来館者を待つだけでなく、積極的に学校現場に展示室を持ち込む方法を検討する必要性に迫られている。

そこで、展示資料を使った歴史学習教材を開発することで、学校現場での利用を容易ならしめ、歴博展示の教育普及への一助とする。またそれによる波及効果として、歴博の社会的認知度を高めて存在意義を示し、さらには観

客動員にもつなげる。…研究成果の社会還元、教育普及

これにあたっては、歴博館内の教員のみならず、学習教材を実際に使う学校現場の教諭と共同する必要がある。また学習教材の開発・販売に長けた外部機関と連携して共同開発プロジェクトとして実施し、歴博ならではの産学連携のあり方を実現する。

2. 研究組織（◎は研究代表者）

田中 大喜 本館研究部・准教授

樋浦 郷子 本館研究部・准教授

◎村木 二郎 本館研究部・准教授

工藤雄一郎 学習院女子大学・准教授

曾雌 健二 山川出版社・取締役編集長

水島 直樹 山川出版社・部長

土居 由佳 山川出版社編集部

(37) 研究助成 美術に関する調査研究の助成 研究題目：六朝装身具の復元的研究 (研究代表者 上野 祥史)

1. 目的

三国時代から南北朝時代にかけては、古典的中国世界が変容し、転換してゆく時期にあたる。思想、行動ともに、新たな時代に向けた胎動が始まる時期にあたる。四世紀以後、中国では思想・生業、行動形態の異なる集団が混在するなか、旧来の社会秩序は崩壊し、新たな社会秩序が構築されてゆく。装身具は、身分秩序、社会階層を可視化する装置であり、こうした価値や観念の変革を探るには好適な資料である。装身具は、身分秩序の変化や中国的装飾をまとう仏像の登場など中国社会の変容を検討できるだけでなく、中国と周辺地域の相互交渉を考える上でも有用な資料である。こうした変化の多くは、五世紀以後に明確な形としてあらわれてくる。しかし、その基礎をなす三・四世紀の装身具の状況については、出土資料が多いにもかかわらず、十分な検討が進んでおらず、その実態が整理されているわけではない。装身具を通じた比較研究を有用なものとするために、両晋期を中心とした装身具の実態解明に取り組む。

2. 今年度の研究計画

本研究では、三国時代から南北朝時代にかけての中国を対象とし、装身具の実態を明らかにすることを目的とする。出土資料をもとに、「身体装飾の形」を類型化し、性別あるいは社会階層など、被葬者の社会性と身体装飾との対応関係について整理する。主に、両晋期を中心に、身体装飾の形を整理することにしたい。壁画などの画像・図像、墓の副葬品、仏像などの立体造形など、さまざまな次元で装身具はみえているものの、名称同定等、考証学的な認識の域を出る議論は少なく、装身具の組合せ、その社会的価値（機能）へと議論が及ぶことは少ない。本研究では、出土資料を中心に文献資料を対照しつつ、「装身具」をめぐる人の動き、認識へと接近する。身体装飾の形に注目することにより、古典的中国世界から新たな秩序が創出される過程を多次元で描き出せることにつながる。（単年度事業であるが、社会状況により期間の延長が認められたものであるため、計画、経過、成果の記述には2021年度に重複する部分がある。）

3. 今年度の研究経過

両晋期を中心に南北朝期にかけての装身具について、出土資料をもとに情報を集成し、装身具の形態及び組合せをもとに、「身体装飾の形」の類型化に取り組んだ。こうした現象整理をふまえ、装身具の保有者やその社会階層、視覚的効果などに注目することで、装身具の「扱い」を明らかにし、装身具をめぐる意識・行動の復元へと検討を進めた。河南省洛陽や陝西省咸陽、遼寧省朝陽と江蘇省南京という4つの地域を対象として、身体装飾の形を体系的に示すことにより、金璫（冠飾）や透彫帯金具（飾帯）など個別の検討視点や、文献資料を前提とした考証学的視点を相対化した、新たな装身具研究を展望した。

4. 今年度の研究成果

両晋期の装身具体系，すなわち身体装飾の形の傾向を示すことにより，複数の方向へと議論を進めた。一つは，身分秩序を反映した「身体装飾の形」を実物に即して復元することである。輿服志などの文献資料が記録する服飾制度を相対化し，理念と実態を対比することにより，装身具にみえる現象を，両晋期の社会論や物質文化論として評価した。装身具を，制度を検証・実態化・可視化する装置としての限定性から解放することに努めた。二つ目に，朝鮮半島（三国）や日本列島（倭）との比較をおこない，周辺諸地域が新たな社会秩序を構築するなかで，身分秩序と連動した中国の装身具を如何に利用したのかへと議論を進めた。文献史学研究で指摘される府官制（中国政治制度）を導入した社会秩序の構築と対比した検討が可能になることで，東アジア交流史への論点の提起にも繋がった。そして，人の身体の装飾とその象徴化の方向性を探ることで，仏像を受容する中国世界においての，身体装飾の比較の素地を整えた。これらの成果の一部は，第1の論点を中心とした論文「六朝装身具の復元的研究」（鹿島美術財団の機関紙等にて公開予定）にまとめた。

5. 研究組織（◎は研究代表者）

◎上野 祥史